



目次

．その他の国内（12人）	217
中村先勝さん証言（7歳、小学校1年生、群馬県太田市）	217
関康治さん証言（13歳、小学校5年生、長野県南安曇郡高家村）	217
（編集委員注）	222
金野久里子さん証言（10歳、小学校5年生、秋田県二ツ井町切石）	223
長谷博子さん証言（8歳、小学校2年生、長野県篠ノ井町）	226
市東真弓さん証言（17歳、女子挺身隊、横浜市鶴見区下野谷）	229
関塚勇さん証言（10歳、小学校5年生、埼玉県鴻巣町）	232
山田静子さん証言（7歳、尋常小学校2年生、北海道空知郡字茂尻）	233
浅利勝美さん証言（6歳、国民小学校1年生、三重県宇治山田市、現伊勢市）	238
佐藤佳士さん証言（14歳 実業学校1年生 山梨県北都留郡猿橋町）	241
荻田保元さん証言（11歳、小学校5年生、徳之島）	244
鈴木けい証言（9歳、小学校4年生、北海道網走郡高野）	247
村田けいさん証言（3歳、茨城県東茨城郡小川町）	249
（3）軍隊・軍属・軍関係経験	250
a. 外地（8人）	250
大塚栄三さん証言（25歳、軍隊経験者、中国内モンゴル、千葉市新町出身）	250
藤代喜一さん証言（23歳、軍隊体験者、中国山東省及び済南出征）	253
堀内徳司さん証言（26歳、軍隊経験者・農業従事、千葉県芝山町）	256
伊藤清さん証言（〇歳、なにをしていたか、どこに居られましたか）	258

・ その他の国内（12人）

中村先勝さん証言（7歳、小学校1年生、群馬県太田市）

群馬県毛里田村（当時の名前）の農家の息子として生まれた。太田市には軍用機を製作していた中島航空機の本社工場があった。家から工場までの距離は4km程度であった。この工場を狙った空襲があった時、村からも見える大きく煙が立ち昇った。私は不安を感じたが、祖父は木刀を持ち出して、「あれは煙幕だ。」と叫んでいた。なぜそんなことを言ったのかはわからない。工場は金山の東麓にあったが、日本全土で空襲が拡大したので、工場は部品を松林や学校に疎開させていた。ここでは「隼（はやぶさ）」戦闘機や「呑龍（どんりゅう）」双発爆撃機を製造していた。8月14日夜間、隣の部落に焼夷弾が投下された。約20戸のうち4分の1が被害を受けた。終戦十数時間前であった。そこは軍事施設がなにもない農家であった。不発の焼夷弾から黄緑色の液体が漏れていた。焼夷弾の錘（おもり）は厚さ約15cm、直径約20cmあった。祖父は戦争継続のために金属を供出命令に対して、まじめに家の鉄格子まで供出した。ところが、村の白壁の土蔵は戦時中迷彩を施すために黒く塗ることが強制されたとき、祖父は黒く塗ることは避けて、竹を立てかけてカモフラージュしていた。私が現役時代、市原に通勤していた頃、白壁であるが下地に黒い色が見えるものもあった。土蔵壁の黒色迷彩は全国的規模で行われたのであろう。

これより先に、アメリカ軍B29が近くに墜落した事件があった。私は、子供心に隣部落への空襲は戦後アメリカ軍が上陸して、B29の墜落事件を調査する際の目印として記録するためではないだろうかと考えた。私は高高度を飛行するB29の編隊を迎撃に向かった単独の日本軍戦闘機が逆襲撃されて墜落して行く光景を見たことがある。

村の噂では、B29に女性の搭乗員がいたそうで、それをアメリカの兵隊は女好きだから女性を搭乗させるのだと揶揄していた。一方、担任の先生は絵の先生でもあったが、墜落したB29のスケッチをしてきて、生徒らに見せながら、B29には射撃手が各位置に配置されていることを説明した。私はすごい飛行機だと思った。その先生も出征したが、私は兵隊となる先生を見送った。

関康治さん証言（13歳、小学校5年生、長野県南安曇郡高家村）

私は、1933年（昭和8年）生まれなので、日本が国連で満州国建国を認められなかった為、国連を脱退し、孤立して戦争への道を通る時期に生まれた。物心つく頃には、絵本も支那事変の事が描いてあり中国人を卑下する内容であった。町内では、防空演習などが頻繁に行われていた。終戦当時の家族は母と

私、妹の3人家族であり、私は長野県の高家（たきべ）国民学校5年生であった。疎開のとき5年生を2回繰り返したので13歳になっていた。生まれは東京市大森区（現在、大田区）池上 徳持町である。1940年（昭和15年）大森区立池上尋常小学校に入学したが、その年は皇紀2600年の祝賀行事が国中大々的に行われた年で、次のような歌を歌わされた。「金鷄（キンシ）輝く日本の、栄えある光、身に受けて今こそ祝へこのあした、紀元は二千六百年、ああ一億の胸は鳴る。」と勇ましい歌を歌いながら近くの馬込神社まで行進して神主に御祓（オハライ）を受けた。昭和15年は西暦1940年で皇紀2600年は西暦1940年より660年前で、日本では神武天皇が生まれた年だと聞かされた。翌1941年には学校も国民学校と改名になった。教育も軍事色の強いものだった。学校にも、小銃など、並べてあり高学年は軍事教練をしていた。学校には、奉安殿（天皇の写真や詔勅などが収められていたようだ）二宮尊徳の石像があった。学校の授業は、1年生の時は、国語は「サイタ サイタ サクラガサイタ」とか「ススメ ススメ ヘイタイススメ」日本は神の国で、天皇は現人神である等神話が多かった。大日本軍人は、世界で一番強いと教えられた。毎日朝礼で宮城に向かって最敬礼をして校長先生の訓話があった。教育勅語、歴代の天皇の名前等暗記させられた。

大本営発表のラジオ放送では、盛んに日本が戦果をあげている放送をしていたので、お祭り気分で皆がバンザイ、バンザイで浮き立っていた様に記憶している。まさか日本に敵の飛行機が爆撃するめに侵入してくるとは誰も思っていなかったことなので驚いた。

初空襲の体験は、忘れられない。1942年（昭和17年）4月18日だと記憶しているが、昼ごろいきなり空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り、敵の飛行機が数機、低空で飛来して来た。航空母艦から発進した艦載機と後で聞いた。私の家の近所に憲兵隊があり、そこから高射砲が撃ったので、その音に、びっくりしていた。後で聞くと砲弾の炸裂した破片が降ってきた破片が学校に飾ってあった。高射砲が撃たれたのを体験したのは、その時1回だけだった。

1944年（昭和19年）に入ると、東京も毎日、敵の飛行機（B29）が高度約1万mで、毎日数百機飛来したと言われるが、軍需工場などを狙って爆弾を落とし、神田あたりも焼夷弾でところどころやられはじめた。そのころ神田あたりが空襲でやられたと聞き、現場を母と妹と3人で、省線電車に乗って、わざわざ見に行った。丁度火事にあった後ようだった。私の家でも、隣のおじさんが、北側の50坪ばかりの畑のなかに大きな栗の大木を切りそれを組み立てて、周りを土かぶせて固めた防空壕を作ってくれた。この恐怖感というものは体験したものでなければわからない。毎日、警戒警報、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴ると近所の人たちとそこには入った。その頃、近所では頻繁に戦死

した人の葬儀が行なわれていた。なかでも日本郵船だとか船会社関係が多かったように記憶している。1944年（昭和19年）7月の5年生のときに私の学校の集団疎開があった。私はそれには参加できなかった。

私の父は満州に出稼ぎ中、車に轢かれる事故で大怪我をして帰国したが、もはや働くことが出来なかった。父は「満人が運転する車に轢かれた」と母が話していた。当時満州は日本の植民地であった。そこで父より、17歳若い母が働き始めた。母は、下丸子にある軍需工場に雑役婦として働きに行っていました。父は私が8歳のとき脳溢血で死亡した。それから私たちの苦しい生活が始まった。

母も、私のことを不憫に思ったのか、区役所に斡旋して貰い区内の大森区馬込国民学校の寮母となって大森区立馬込国民学校の4年と5年生で編成された学級の集団疎開に妹と一緒にいった。疎開先は熱海市下多賀で網代海岸の近くの福屋旅館（当時は学寮）であった。小学校の集団疎開は教師も同行し、疎開先では旧旅館の大広間で授業をした。私はその生徒より1歳年上で当時5年生だったので、本当なら現地の小学校に行くのが当然だが、一人だけの為に現地の学校に通わずことはできないと学校側から拒否され、泣く泣く、4年生に下げられてしまった。現地の学校はそこから2km離れていた。当時の事情ではやむを得なかったのだろう。集団疎開の学級に編入されて、5年生を2度経験することになった。子供心にも悔しく残念な思いをした。

集団疎開の子供らの生活は畳の大部屋で雑魚寝することが基本である。食事は、米が少なめ大豆ごはん、高粱ごはん、大根ごはんであった。おかずは身欠き鯿を覚えている。ただ、海が近かったので地元の人々の差し入れがあり、時々ブリの刺身等もあった。しかし、量は少なく、いつも腹をすかしていた。1945年（昭和20年）1月、皇后からと、一人一個ずつの餡パンぐらいたの特大の大福もちと1枚のビスケットをもらった。とてもおいしかった。「次の世を 背負ふべき身ぞ 逞しく 正しく伸びよ 里に移りて」という皇后陛下の詩を皆で暗唱させられた。この頃から東京の空襲が一段と激しくなって来たのを、東京から来る父兄により実感させられていた。3月9日の真夜中に起こされて、真鶴半島の東の空の周りが真っ暗なのに夕焼けの空のように赤かったのが印象的だった。東京が大分やられているとみな心配顔でながめていた。

この頃になると生徒の家が罹災したとか、縁故疎開するため一人二人と両親に引き取られて行った。普段の生活は、不衛生で衣服には虱（シラミ）がいっぱいいた。女の子は長い髪の毛なので虱が頭にいた。服や下着に縫い目に白い1mm大の粒が並んでいたが、これが虱の卵であった。毎日下着は替えなかった。風呂も時々しかなかった。ときどき大人が子どもの服や下着を、ご飯を炊く大釜で釜茹でしていた。石鹼もなくなっていたから、灰を使って洗っていたよう

だ。授業は長い机の前で正座させられ、朝 8 時ごろから 4 時ごろまで授業があった。ただ、毎朝 2km の海岸を駆け足させられたり、乾布摩擦をやらされたりした。課外活動は、比較的のんびりしたもので、ワラビやゼンマイを取りに行った。山の方に行くと兵隊さんが、圧力釜のなかに松の根っ子を砕いて釜に入れ、重油のような液体を注出していた。上陸用舟艇の燃料だそうです。兵隊さんは、私たち子どもに木を削り箸など作ってくれた。その兵隊さんたちはある日、舘山の方へ移動しまったが無事に着いたか途中で敵の潜水艦に沈められたかが気になっていた。

授業の内容は現在と全然違っていた。神話「天照大御神（あまてらすおおみかみ）」など国語は軍隊調の物語が多く、爆弾三勇士、乃木大将、東郷元帥の話であった。野口英世の話もあった。唱歌では、「海は広いな大きな」とか「昔々その昔、椎の木林のすぐそばに」の歌もあったが、「出て来い、ニミツツ・マツカーサーで出てくりゃ地獄へ逆落とす」等という歌を歌いながら行進したことを懐かしく想いだす。修身では教育勅語を覚えさせられた。「朕思うにわが皇祖皇宗、国をはじむること高遠なり、徳を建つこと深厚なり。わが臣民、よく忠によく孝に・・・」である。大東亜戦争宣戦布告の詔勅「天佑を保有し、万世一系の天皇は・・・」も覚えさせられた。戦局が悪化した頃の体操では木刀剣術や竹やり訓練があったが、声や音を立ててはいけなかった。敵に気付かれないようにするためであった。子どもらは米英人のことを毛唐（けとう）と言って軽蔑していた。中国人のことをチャンコロと蔑視するのは戦後に聞いた。朝鮮人に対することは覚えていないが、かなり激しい差別はあったようだ。

熱海市下多賀の福屋学寮も危険が近づいたことで、学校側は岩手県盛岡市の法華寺と云う所に再疎開することに、決定しました。まさに沖縄戦が終結する 6 月 24 日に母は母の姉の婚家に私たち兄妹をつれて押しかけた。それと同日に集団疎開の皆も、私達と一足遅れて、岩手に旅発った。汽車に乗って東京に戻り、新宿から汽車で 8 時間かけて松本の 1 つ先の田沢で下車した。途中の車窓は半年前と違って空襲で見ても無残な光景に変わっていた。田舎の光景は空襲とは無縁の、のどかな光景だった。

伯母（母の姉）の家では、気持ちよく迎えてくれた。母は「東京の家が空襲で焼けた」と嘘を言っていたが、あとで罹災証明書がないこと等でばれてしまった。そこではテミヤといって鶏小屋の横の農機具置き場を片づけてそこに荒むしろを敷きそこに住むことになった。母は農家の手伝い（田の草取り）等をしていましたが、そのうちに近くの製糸工場に勤め始めた。そこで毎日蚕の蛹（サナギ）を貰ってきて食べさせられた。

そのうち農機具置き場を使いたいからとそこの家の蚕室（サンシツ）のある土蔵に移った。お蚕（カイコ）が桑の葉っぱを食べる音は大きかった。そこで

終戦を迎えた。私たち子供は近くの新田堰(シンデンセキ)に泳ぎに行った。

1945年8月15日には長野県南安曇郡高家村の伯母の婚家にいた。特別放送があるというので大人たちはラジオの前に集まった。天皇の声を初めて聞いた。甲高い声で、調子が普通の人とは違った言葉であった。意味はわからなかったが感で戦争が終わったと感じた。大人は黙っていたが、これからは灯火管制の暗い生活をしなくてもいいという安堵感が見られた。表通りでは子どもが「日本は戦争に負けた」と私が言っても「うそ！」と信用しなかったが、悔しいという感じではなかった。電燈の暗幕も取り払われ、これで長い戦争は終わったと安堵した。

しかし、苦しい母子家庭の生活は終わらなかった。伯母は母に長野県安曇郡陸郷村の実家へ行くように勧めた。そこの大八車で、20km ぐらい離れた母の実家に家財道具を積んで、従兄(当時22歳)と一緒に運んでくれた、従兄はマラリヤという病で帰っていた。途中、梓川の長い(360m位)橋で当時は、木造の橋が、真ん中あたりで流され幅30cm ぐらいの板を2枚合わせて渡した。仮橋があり、そこで荷物を全部降ろし、大八車を分解して渡し、荷物を積替えて行った。ようやくたどり着いた。従兄はやがて回復して、農家を継いだ。母の弟は近衛兵であったので、10月には帰省していた。

その年の秋10月に大水害があった。私たちのいた家は犀川の川岸に近かったので、だったので、普段は、堤防から10メートルぐらい降りて洗い物などしていた。水位が低い時でも川の流れが速く大人でも向う岸に渡ることは出来ない所で、大雨が降ると、急に水位が上がり危険な河川で、10月頃台風があり、ごうごうと川が流れ、あたり一面に氾濫した。私たち親子は山の中腹にある、沢の家に水が引くまで厄介になった。水がひいた後は一面砂の河原になっていた。

戦後の国民学校の教科書は、ほとんど墨で塗られていた。読むところがなかった位だ。給食はまだなく、弁当を持参していた。意地悪な子どもが食べた梅干の種を私の弁当にいれてからかった。

1946年3月に、母は生計を立てる為、草鞋を作って松本市に行商を始めた。次に、母はお蚕の真綿を紬ぐ仕事を教えて貰い、元店の広場で糸を紬ぐ機械を貸して貰い、その仕事を朝から夕方遅くまで、毎日やっていた。相変わらず生活は苦しく私は、神社や公園に枯れ枝などを見つけに行き拾って来て燃料に使っていた。そのご母は男性と知り合い、内縁の妻となった。母は子どものことを考えて籍は入れなかったのだ。学校の春休み、夏休み、秋の休みには、母の姉の家に農作業の手伝いにいった。食費を節約する為だ。叔父は、他人のつもりで遠慮なく作業して貰うからと言い働いた。慣れない農作業は、身体がとても疲れた。でも家に帰るよりずうっと、ここに居たい気持ちだった。食事は三度三度、白いご飯が食べられるし。作業以外は暖かく接してくれ、いとこたち

と友達みたいになれた。中学 2 年生のとき、家は貧乏でそんなお金は無い筈だが村が援助してくれ、新潟県柏崎・長岡の西山油田等修学旅行が出来た。柏崎で家へのおみやげに朝とれたばかりのイカを 6 匹ほど買い、列車の網棚に載せておいたら、車内が暑かったためにイカを包んだ風呂敷から白いうじ虫が沢山わいてきて、捨てざるを得なかった。中学 3 年の夏、炭鉱の仕事のアルバイトに索道が下に着いて石炭を籠から出したのをスコップで片付ける作業を 4、5 日働いたが、炭塵のせいで、気管支炎にかかり、学校を一ヶ月ぐらい休んでしまった。義父が石炭を採掘する仕事を請負一人で横穴を掘って石炭が出るところまで坑道を掘る仕事をしていたので私も休みの日に、伝いに行った。幅 1 m、高さ 1.2m ぐらい丁度腰をかがんで通れる坑道を 5, 6m 掘るごとに 5cm の角材でトロッコの線路を敷設して、30 メートル程掘り進んだところからツルハシで横に掘って行き途中松の丸太で支柱を建てながら、掘ったあとはズリ（石炭以外の岩石）で埋め戻しながら掘り進む仕事で暗い坑道の中で一日太陽に当たらないで過ごした。硬い岩には直径 3 センチぐらいの穴を 80 センチぐらい掘り、ダイナマイトの先に雷管導火線をつけ安全なところまで逃げて、爆発するのを待って作業を開始した。つるはしや鉄鑿（のみ）が傷んだときは、フイゴでコークスを焼き鍛冶屋の仕事をした。一日やると、身体中真っ黒けである。1950 年 3 月ようやく中学校を卒業できた。新制高校には経済的な理由で進学することができなかった。卒業後私は、里山辺村へ引っ越し小さな鉄工所に勤める事になった。（日給制で 1 日 50 円）月に 1500 円で鉄工所の機械工見習いとして、勤める事が出来た。ある日、同級生にばったり会ったが、私は油だらけの汚れた作業衣姿で、相手は高校生の制服姿で落差が大きくとても嫌だった。しかし、この時習得した技術が将来の役に立った。1960 年に石川島播磨重工業に就職できた。1977 年 NHK 学園高校の通信課程を始め、卒業した。こうして私の戦後が終わった。

戦争は良くない。暴力はいけないが、戦争は暴力を正当化していた。ある日、公衆の面前で上官が部下を殴りつけていた。部下は殴られても反抗せず、倒れても直立不動の姿勢を保とうと努めていた。私は、この事件が戦争時代の暴力をよく表わしていると思う。疎開生活は勉強もできず、食事も不十分で、衛生状態は極めて悪く、子どもにとって戦争は悲惨である。父親のいない家庭は生活がとても苦しかった。私は戦中戦後を生きた者として戦争の悲惨さを見聞きして、絶対に戦争を許してはならない。

（編集委員注）

証言者は戦争のおかげで住所を転々と変え、戦中戦後の 2 年間で 8 回も転校した学校は、池上国民学校→馬込国民学校→高家（たきべ）国民学校→陸郷国民学校→源池国民学校→下諏訪南国民学校→源池国民学校→本城国民学校であ

る。

証言者はこの証言をきっかけに戦前、戦中、戦後、現代編の人生記録をまとめている。この証言は戦前・戦中編の抜粋である。

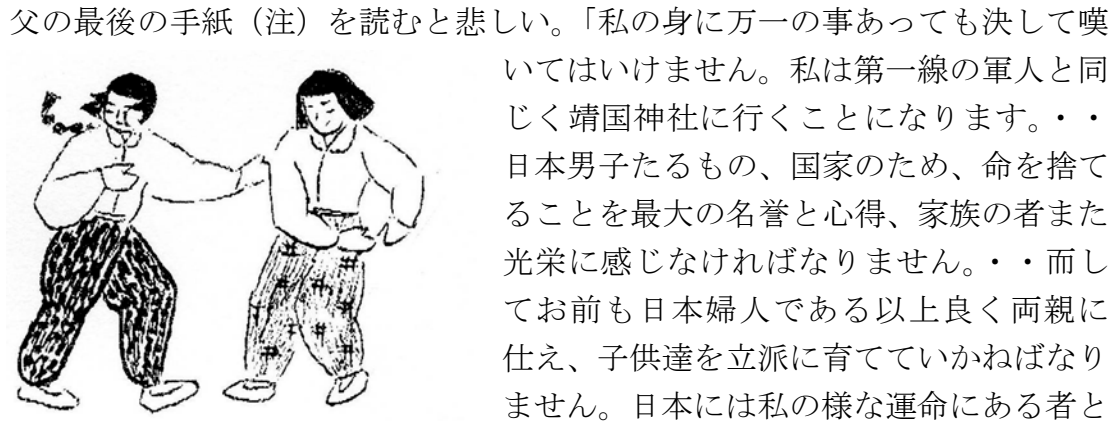
金野久里子さん証言（10歳、小学校5年生、秋田県二ツ井町切石）

私の終戦放送の日は夏休みであった。朝から能代川で遊んでいた。家に戻ると重大放送を聞いた女子の同級生が私に「戦争負けたのよ、残念だね」と告げた。私は「戦争が終わった」と思い、次にホッとした感じになった。秋田県では8月末に2学期が始まる。朝礼で戦争が終わったと言う話があったが、よく覚えていない。それから教科書づくりが始まった。担任の先生が授業のはじめに、55人の生徒に教科書を開かせて、「○ページの○行の文章を墨で塗りなさい」と見本を見せながら、軍国主義的な文章を抹消するように説明した。生徒は習字の道具を持ってくるように事前に言われていた。修身と国語は真っ黒けになった。

私の家は、父が軍属として召集されてから、収入がなくなり貧しい生活が強いられた。家には6人の子供と祖父祖母がいたが、働き手は母一人であった。ある日、配給でゴム長靴の抽選があたったが、支払う金がないので、支払いができる人に譲ってしまった。当時は物資が統制されており、マッチ、毛糸などは町内会で割り当てがあり自由に買えなかった。私の着物は祖母と母の古着を縫い直したものであった。母は田と畑で仕事をしながら、着物を縫う手間仕事をしていた。

父は村の鍛冶屋であったが、軍からの要請で技術職人を軍属として召集した。父は、1942年から南洋インドネシアのハルマヘラ島（注）に駐留していた1944年9月8日に、敵機の爆撃で防空壕が直撃され、避難していた時、防空壕の柱が折れて、父の心臓をつぶしてしまった。父の遺髪が届いた。40歳だった。父は筆マメで届いた葉書の厚さは約10cmにもなった。母は便りが届くといつも子どもたちに読んで聞かせていた。母はその葉書を大切にしていた。ある日の葉書には、秋田の家にも植えてあるネムの木はハルマヘラ島にもあるよと書いてあった。私も下手な字で父に葉書を書いた。私は、父の思い出を「いきいき大学」の「ふれあい」にも投稿した。それは、家にあった合歓（ネム）の木を父がハルマヘラ島でも見つけて、秋田の家を偲んで書いた戦地からの手紙のことである。千葉に永く住んでいるけれども、帰省時に家の合歓の木を父だと思って挨拶をしてきたが、ある日その木がなくなっており、大きなショックに立っていられなくなった。それ以後、千葉の家の庭に合歓の木とよく似たオジギ

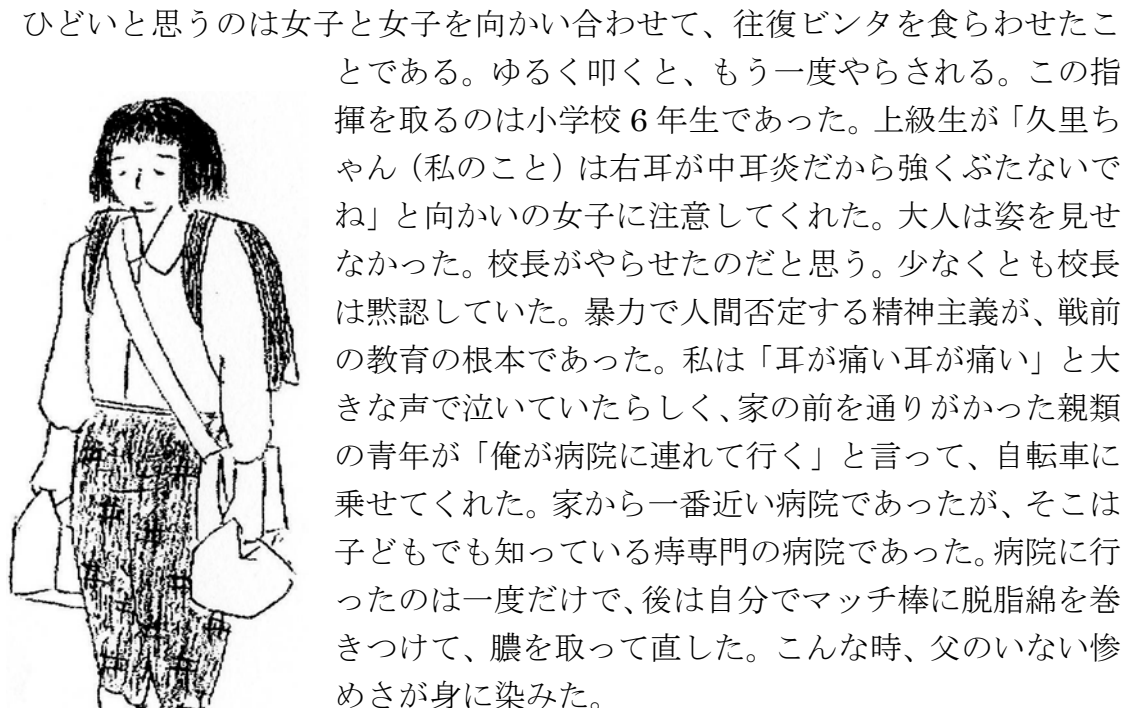
ソウを植えて朝晩、父だと思って言葉を交わしている。



父の最後の手紙（注）を読むと悲しい。「私の身に万一の事あっても決して嘆いてはいけません。私は第一線の軍人と同じく靖国神社に行くこととなります。・・・日本男子たるもの、国家のため、命を捨てることを最大の名誉と心得、家族の者また光栄に感じなければなりません。・・・而してお前も日本婦人である以上良く両親に仕え、子供達を立派に育てていかねばなりません。日本には私の様な運命にある者と

お前達のような境遇にある人が幾万人あるかわかりません」と綴られている。父は、本当は戦争で死にたくないし、愛する家族の元へ帰りたいに違いないが、軍事郵便で本当のことが書けなかったと思うと悲しい。亡き父は子どもが好きで、塾で村の子どもに教えたり、村の子どものスキーが壊れたりすると無料で直してやったりしていた。それほど父は人がよかったが、私はそんな父を誇りに思う。

戦時中の秋田県の田舎の小学校は、3年生以上は全員加入制の「少年団」活動に組み入れられた。およそ週に2回、能代川の川原で訓練がなされた。空襲時に身を守る方法として、両手の親指で耳を覆い、残り4本指で目を覆う訓練があった。これは有効であった。



ひどいと思うのは女子と女子を向かい合わせて、往復ビンタを食らわせたことである。ゆるく叩くと、もう一度やらされる。この指揮を取るのは小学校6年生であった。上級生が「久里ちゃん（私のこと）は右耳が中耳炎だから強くぶたないでね」と向かいの女子に注意してくれた。大人は姿を見せなかった。校長がやらせたのだと思う。少なくとも校長は黙認していた。暴力で人間否定する精神主義が、戦前の教育の根本であった。私は「耳が痛い耳が痛い」と大きな声で泣いていたらしく、家の前を通りがかった親類の青年が「俺が病院に連れて行く」と言って、自転車に乗せてくれた。家から一番近い病院であったが、そこは子どもでも知っている痔専門の病院であった。病院に行ったのは一度だけで、後は自分でマッチ棒に脱脂綿を巻きつけて、膿を取って直した。こんな時、父のいない惨めさが身に染みた。

登下校は集団で行動した。私の村は長い形なので、上、

中、下区に分かれていて、私は下区であった。登校時の姿は背中にランドセル、肩にタスキ掛けで、防空頭巾と救急袋を提げていた。救急袋には包帯や富山の置き薬ぐらいしかなかった。薬類はすでに欠乏していた。自席に道具を置くと、朝礼現場に向かった。校長の訓話は10分程度の長い話であった。毎日のことで、生徒はうんざり聞いていた。校長訓話が終わると、6年生が号令を掛けて、1年生から6年生まで全学生を宮城（きゅうじょう、天皇の住まいのこと）方向に向かせ、「誓い！」と合図をし、全生徒に「私達は撃ちてしやまむの精神で今日もがんばります」と大声で誓わせた。3年生の私には「撃ちてしやまむ」の正確な意味は理解できなかった。登下校時は奉安殿の前で最敬礼しなければならなかったのは当然であった。当時の小学校は生徒に職員室の清掃をさせていた。これが生きた修身なのであろうが、職員室は職員が清掃すべきである。生徒が掃除の用事で職員室に入る場合は「〇年〇組、〇〇以下〇名は職員室の掃除に参りました」と挨拶し、掃除が終わる「掃除が終わりました」と報告して職員室を出なければならなかった。まるで、軍隊であった。

当時の小学校は、授業らしきものはほとんどなかった。山を開墾しジャガイモなどを植えた。肥料として学校の便所から糞尿を容器に入れて、二人一組の生徒に天秤棒で畑まで担がせた。田、山の広い野原に生徒を1列に整列させ、薬草のセンブリを摘ませた。センブリを学校に集めて軍に献上した。兵隊の薬に使用されたと思う。また、鎌で雑草(牧草かもしれない)を刈り、学校まで運ばされた。児童の無報酬労働であった。遠足は行軍と呼ばれていた。何里もただ歩くだけで楽しくなかった。当時は靴もなく、私は下駄で歩いた。おかげで私は痔がひどくなった。

教科では、国語は1年生のとき「アカイアカイアサヒアサヒ」と教えられ、2年生のとき平かなで教えられた。算術は数字で教えられた。音楽は君が代、童謡を教えられた。体操はブルマで駆け足させられた。修身は教育勅語の暗唱が求められた。私は全部暗記していたが、今は忘れた。町で出征兵士を見送るときは、3年生以上の生徒は「勝ってくるぞと勇ましく誓って国を出たからにや手柄立てずにおかりょうか」を歌いながら、二ツ井駅まで45分行進した。この歌は学校で教えられたと思う。

私の村は国道のそばにあったので、軍隊が移動する光景をよく目にした。戦車などは道路を損傷させて走った。兵隊は何百人と隊列を組み、徒歩で行軍してきた。私の家で将校が休憩した。祖父は貧しいのだからお茶だけで接待した。他の家はお茶以外に漬物などで接待していたが、祖父は軍隊にへつらうようなことはしなかった。兵隊たちは別の場所で休憩していた。私は、家の玄関に将校が脱いだ革製の長靴（当時は、チョウカと読む）を見て、立派なものだと思った。私はゴム長も買えず、下駄であったから、驚いた。

戦後帰国した予科練組や若い兵隊が学校に戻って教鞭をとったが、教育方法は戦後の民主主義に反する軍隊的であった。たとえば、できない生徒を雪が積もっている校舎庇の下に立たせたり、雪の積もっている場所を男・女子ともに裸足で 3km を走らせていたりした。さらに男子には、床の上に木刀を並べて、その上に正座させていた。今なら校長の責任が追及される大問題である。

私の村の上空に B29 が飛来したので、灯火管制が求められた。空襲警報発令のたびに土蔵に入り、爆音が消えるまでじっと耐えていた。村に対する実際の空襲はなかった。ある日、親戚の人が私を小高い場所に設置された防空監視所までつれて見学させてくれた。敵機の来襲の監視方法や記録内容を担当者から直接聞いたことは興奮を呼び起こした。秋田県の戦災は港町の土崎に対する艦砲射撃（空襲かもしれない）が悲惨である。

千葉に来て、千葉の大空襲を知った。現在の中央区役所は元川崎銀行であるが、史跡が残されたのはよかったと思う。

戦後は、父が戦死した家は貧しい生活の極みであった。母 30 代で未亡人となり、身を粉にして家族のために働いてくれた。苦勞した母は 2006 年に 96 歳でなくなった。母はよく私に「私の苦勞話を紙に書いたら、紙が何枚あっても足りない」と言っていたが、結局何も書き残さず逝ってしまった。

私は戦争に絶対反対である。その理由は、近代の戦争は軍隊と軍隊の戦争でなく、弱者の老人、子ども、女性まで巻き添えになるからである。また、長い年月をかけて築き上げた全てのものが破壊されるからである。これから二度と戦争を繰り返さないために、若い世代の人たちは自分の責任を自覚して欲しい。
(編集委員注)

Pulau Halmahera インドネシア 北東部、モルッカ諸島北部にある同諸島最大の島。別称ジャイロロ Djailolo 島。

(編集委員注) 父君の最後の手紙は、二ツ井町遺族会発行の「忘れな草」(1974 年)に収録されている。この本の緒言には二ツ井町長は「郷土出身の戦没者の英霊に何としても答えてやらねばと」と動機を書いている。しかし、本当に「英霊」に答えるには、二度と戦争を繰り返さない決意が必要である。

長谷博子さん証言 (8 歳、小学校 2 年生、長野県篠ノ井町)

私は、終戦日には長野県篠ノ井町通明国民小学校 2 年生だった。家族は軍人(陸軍少佐)と母の両親、祖父母、兄弟 3 人の 7 人世帯であった。1945 年に、父の転勤の関係で家族は千葉市椿森を離れて長野県に移住していた。父は、長野県松代の大本營地下壕建設に従事していたと想像しているが、家族には一切

話さなかった。お寺の一角の長屋に住んでいた。私は、終戦の放送を知らなかった。家族で千葉に戻るときに戦争が終わったことを知らされた。長屋にいたとき、隣の東京から来た家族はしばしば喧嘩をしていたが、親の話によると食べ物の中で本気になって喧嘩をしていたらしい。喧嘩の声を聞くのは、とてもいやだった。私の家は、父が高級軍人だったから、戦時中いろいろ優遇されていたのだと思う。長野県の人には疎開の人に対しても優しく、人情が熱いと自分も体験したが、それでも他県から来た人は食べ物に不自由していた。富山から来ていた女性は、食料が不足するので母乳も出なくなって困っていた。ある日、杏の実がなっていたので、家族でおなか一杯食べたところ、おなかの具合が悪くなった。土地の人に食べ過ぎだと笑われたが、ひもじかったのである。長野県の桑畑やりんご畑にもアメリカ軍の艦載機が農村の人々に機銃掃射を浴びせた。私は直接艦載機に遭遇しなかったが、地元の人たちが機銃掃射の恐ろしさを語っていた。もはや軍事施設が攻撃対象でなく、非戦闘員の日本人が攻撃の対象であった。日本軍も外国で同じことをやっていたに違いない。

私の母は干支（えと）が「五黄の寅」と言っても運の強い干支で、36年に一度しかその寅年は巡ってこないもので、出征兵士の持つて行く千人針にはたくさん赤い糸の玉を作ってあげられた。他の人は1人一つであった。そして、白い割烹着を着て国防婦人会のタスキをかけて出かけていた。ところが、戦後の母の感想は、「畑でスイカを作って、それをすぐ割って青空の下で食べているほうがずっと私に合っていた」そうだ。母は女学校も行かず、和裁学校に行った母には、軍人夫人は窮屈だったに違いない。私は母の手伝いとして、お米、塩、醤油、タバコ、酒の配給を並んで買った。タバコはきざんだタバコが配給になり、父は自宅で辞書の紙を巻いた紙タバコを吸っていた。

長野県の学校生活で記憶している事件は、ある日、天皇が乗った列車が、近くを通過するので、全校生徒約千人が線路脇に立って整列させられた。もちろん、授業は中止しての話である。私は、天皇がどこにいるのかわからなかった。

長野県に移住する前の時代は、千葉市椿森にいた。父は陸軍気球隊、陸軍兵器廠に勤務していた。仕事は主計のようである。出勤時は、家に部下の兵隊がサイドカーで迎えに来た。父は軍服に長靴（ちょうか）にサーベル（日本刀かもしれない）姿で出勤していた。父は決して威張る軍人ではなかった。部下にも家でご馳走を振舞っていた。部下も上官に当たる父の家族に、燃料の薪を縁の下に運び入れていた。長野転勤後、すぐに父が腸チフスにかかり、長野日赤病院に2ヶ月入院した事件があったが、その際、隣のベッドにいた善光寺前の風呂屋主人と懇意になり、退院後もなかよくしていた。父は優しい性格であったと思う。戦後、父は公職追放に会い、家族や知人に戦争のことを誰にも話さなかった。私も父に戦争の話は聞かなかった。父と口論したのは、私が千葉銀

行で労働組合を知り、運動を始めたとき、父は反対した。「お前がしなくてもよい」と言う論法であった。母も父に同調した。私は労働組合活動を通して目を開かせられていたので、労働組合は辞めなかった。もう、成長した私に対して、父は黙っていた。もっと、父とよく話せばよかったと思う。

1944年、1年生のときは千葉市院内国民学校に通った。1クラスは58人であった。学校には、奉安殿があった。このことは関心がなかったので、余り覚えていない。ただ、よく全生徒が講堂に集められ、天皇の写真（これを当時、御真影と呼んだ）の前で最敬礼をさせられた。授業で「ススメ、ススメ、ヘイタイ、ススメ」を教えられた。その後、一時期、1人で成田へ縁故学童疎開をした。その家では、叔父とその離れに住んでいた甥が出征していた。甥は戦死したので、甥の黒枠写真は天皇の写真と並べて飾られていた。叔父は結局不明で、戦死したと思われる。親戚の家には娘が3人いたが、いずれも私より年下でいじめはなかった。むしろ、家族を離れて、他人の家に住んでいる私こそ、寂しいので彼女らに辛くあたった。後で、成長した彼女らに謝ったが、覚えていないと言ってくれた。

戦後、千葉市椿森に戻りたかったが、1945年7月7日の千葉市大空襲で家は焼けていたので、千葉市若松町の母方の家にお世話になった。この家の戸主の叔父は戦死しており、祖父母と未亡人となった叔母と私と1歳違いの男子が農業をしていた。その家は牛も飼っている農家であった。父母は、千葉市都賀の畑を貸してもらって農業をやった。麦、西瓜等を作った。公職追放中の父はもともと農家出身の次男坊であったので農業は自信があった。両親で作物を収穫した。母がリヤカーで行商した。また母は古着を斡旋してもらい、お針の腕も生かして、農家をあてに行商をしていた。母にとって、戦前は軍人の妻として比較的楽な生活であったが、戦後の生活は一転して大変だった。戦後、双子の子どもが生まれ、9人家族となった。

戦後、食糧事情は極めて悪く、配給食糧はくず粉、コウリャン、芋でんぷん、殻入りフスマ、芋の粉（煮ると黒い色になった）等であった。家では、これらに膨らし粉を混ぜてパン焼き器で調理した。たんぱく質は近所でザリガニをとったり、鶏をつぶしたりした。自分で飼っている鶏をつぶすと、それ以来、鶏肉は食べられなくなる友もいた。

4年生の記念撮影は鉄道連隊兵舎を利用した千葉陸軍病院を背にしている。子どもたちは、足袋、下駄、草履、モンペ姿も多い。当時は靴もなかった。私は6年生になってようやく院内小学校の教室に入れた。それまでは轟の現在経済高校になっている場所にあった兵舎を利用した教室にいた。そのとき、登校途中、千葉競輪場が囚人たちの手で建設中であったが、先生は囚人を見ないように注意した。その後、父の勧めで、算盤・簿記を習得するために女子経済高

校付属中学校に入学したが、学費を払うことが出来なくなり、中学2年生2学期より千葉市立椿森中学校に転校して、同校を卒業した。このとき、旧制の学制から6.3.3制の学制に切り替わった。私は新制千葉女子第二高校に進学できた。

後に千葉市議会議員となった千葉通子さんとは小学校・中学校は同期である。私は高校卒業後に千葉銀行に就職したが、彼女は、空襲で家が焼け、中学校卒業して千葉銀行に入行して、夜間高校に通っていた。優秀だと思う。

私は千葉市大空襲を知らないが、父が長野県から千葉に出張した時に偶然にも、千葉空襲に遭遇した。父は椿森の自宅の防空壕に避難したが、眼鏡が吹っ飛んだらしい。

戦争はどんな理由があっても、絶対ダメだ。何もプラスにならない。戦争は、天災ではないのだ。阻止することはできるはずで、私達は二度と戦争を起こしてはいけないし、そうするために行動しよう。若い人には、昔は全て国のためにであったが、今は自分で何か目標を立てて、その実現もめざす夢があるから、がんばって欲しいと思う。

市東真弓さん証言（17歳、女子挺身隊、横浜市鶴見区下野谷）

私は茨城県真壁郡大宝村の地主の家に生まれた。詩人であった父はすでに病死していたので家族は母、姉と私の3人だった。茨城下館高等女学校を終戦の1年前に卒業した。他の生徒は卒業と同時に女子挺身隊への動員があったが、私は母1人を残せないで動員は免除されていた。

下館高女は、水戸学を信奉する校長が代々続いていた。厳しい軍国主義教育がなされた。女子も男子のような扱いであった。生徒の名前は呼び捨てで、男子校と同じように閲兵・行進などまであった。毎日暗唱させられるのは、藤田東湖の長い漢詩「正気之歌」であった。私物検査があった。全生徒を校庭に集めて、教室にある生徒の鞆を検査するのである。生徒が部屋に戻ると「戦利品」が机に山ほど積まれており、一つ一つの物について叱責を受けるのである。私は詩集を持っていたことが咎められた。友人は恋文の下書きが咎められた。人権思想などあるべくもない時代だが、このやり方はひどいと思った。泣き出す生徒もいた。授業時間の半分は勤労奉仕に当てられていた。「公民」の授業で教科書は一度も使われず、教師は公民の授業として「職業に貴賤はない」と言っておしまいになった。英語は1年で教わっただけで、2年から敵性語であるからと廃止された。英語の女性先生は英語から国語の先生に転身した。ピアノがあって、ドイツの歌は許されていた。菩提樹などは歌った。英語の歌はなかった。勤労奉仕は、田植えはなかったが、麦刈り、稲刈り、除草作業など。素人に畑

に入られたのでは農家もさぞかし迷惑だったと思う。しかし、男手は戦争に取られて、私達も少しは役に立ったのであろう。受け入れ農家も小百姓の家では応接ができないので、比較的豊かな区長の家などに派遣された。農作業のほか、軍服のボタン付け作業があった。

卒業年の10月ごろ、挺身隊へ動員（徴用）された。関東鉄道の汽車で大宝駅から取手駅まで走る間にも、挺身隊に徴用される者が乗り込んできて、30-40人になった。最終的に横浜鶴見区の陸軍監理工場昭和組造船の講堂に集められた。50人ほど、独身者ばかり。形式的な訓示は「お国のために尽くす」などと言っただろうが覚えていない。雑多な集団で年齢も私より小さい子もいたし、酌婦のような人もいた。宿舎は小料理屋のような家だった。1軒に20人（20畳に7-8人）ぐらいが分宿した。風呂や寝具は用意されていた。食事は、軍の管理工場であったためか、そう粗末でなかった。軍管理工場と軍監督工場があり、監督工場が、位が上である。しかし、問題は仕事であった。誰かから聞いた情報によると、女子挺身隊採用は男子労働力を確保するためであった。男子労働力が極端に不足していたが、女子を一定数雇わないと男子を雇うことができなかった。男子の勤労働員は日大四商の生徒が100人ぐらい働いていた。女子の主な仕事は食堂世話、事務作業、器用な女子には溶接作業があった。私は事務に廻された。本社の事務はさほど苦勞がなかった。宿舎は自由な雰囲気であった。小学校高等科を終えて1-2年（14-15歳）の女子は家に帰りたと言ってよく泣いていた。

庶務課に配属された。仕事は、食糧の確保である。部長は刑事あがりの顔の利く男で、私は部長の鞆持ちであった。横浜大空襲は、1945年5月半ばの昼間であった。その直後に物資の調達に出かけた。鶴見から東神奈川まで歩いた。いたるところに死体があった。恐怖心などひとかけらもなく、死体を見て歩いた。新子安の駅近くの防空壕に若い男女が抱き合って死んでいた。二人とも靴をはいていなかった。靴は誰かが盗んだのだ。

敗戦まぎわの頃は空襲警報が出ても、あまり防空壕に入らなくなっていた。ある日、東京に向かうB29の編隊に陸軍の練習機（いわゆる赤トンボ）がヨタヨタと近づいていった。かたずを飲んで見ていると、パッと火花のような炸裂があり、赤トンボは炎に包まれて海の方に墜ちて行く。地上の私達は「体当たりだ！バンザイ！」と叫んで拍手をした。私は、生涯かけてこの人に償わねばならぬ。この記憶が、その後の私の生き方を左右した。

3月の東京大空襲は鶴見の総持寺の近くの寮からよく見えた。赤いホホズキのようなきらきらした玉が無数に落ちていった。この夜も、見守る群れから、死んでゆく人たちを言う者はいなかった。私もその1人であった。

寮のまわりに朝鮮人部落があり、屋台でヤキトリを売っていた。誰かが「あ

れは、犬の肉だよ」と言ったが、買う仲間もいた。沖縄人の部落もあった。皆、なんとなく下に見ていた。捕虜収容所があった。収容所は高い塀と有刺鉄線で囲まれていた。強制疎開の後片付けなどの労働に使役されていた。毎朝、20・30人が行進して歩いて行った。彼らは私達を見ると明るく「ムスメサン」と話しかけてきた。無視した。日本人の引率者も注意をしなかった。後で判ったことだが、捕虜収容所のあった地区は完全に空襲から免れていた。機銃掃射もなかった。なぜ、米軍機はそこに米軍人捕虜収容所があることを知っていたのであろう。しかし、私たちの命は皮肉にも彼らによって守られたのだ。

1945年8月15日正午、私は本社の中庭で20人ぐらいの社長家族と社員でラジオを囲んだ。放送は、聞き取りにくかったが、「万世の為に太平を開かん」と言ったので、「戦争が終わった」と理解した。他の人は多分理解できなかったと思う。私は「ああ、これで死ななくていいのだ」と感じた。会社の隣に少年朝鮮人徴用工の宿舎があった。その夜電気を煌々と点けて、夜を徹してトラジを歌い踊っていた。夜、飛行機が飛んで来て「皇国不敗」などと書いたビラを落として行った。捨てる人はいなかった……。戦争は終わった……。

女子挺身隊は8月16日に解散した。旅費は支給されたと思う。私は挺身隊副隊長であったので、残務整理をして、手持ち金75円を持って8月17日に帰省した。

農地解放で、3反5畝の田んぼが戻った。また、小貝川べりの荒蕪地は解放の対象外であったため、何町歩もの土地が残った。この土地を開拓し、広大な農地を持つ。3年間農業をした。大家族制度を頑なに守り続けた旧家は亡父の弟が相続していた。軍人の従兄が二人も帰って来たため、母と共に生家を出る。茂原市に海軍航空隊があり、姉は軍人と結婚し戦後離婚した。私達は一緒に暮らすことにした。

銚子の漁船の底引き網に海軍大尉の死体が引揚げられた新聞記事が載る。軍人は1枚の名刺を身につけていた。この記事は、私にとって一つの“啓示”となる。戦争を直視するきっかけとなったからである。41年後、この軍人の遺族を探し当てる。この経過をまとめた小文が岩波新書「私の昭和史」の中の一つに選ばれて、広く読まれた。加藤周一氏の選ぶところ。遺族は未亡人と1女。親戚のようなつきあい続けている。

(編集委員注) 横浜空襲：インターネットによると、4月18日死者7人、5月29日死者3787人、6月10日死者70-80人となっている。

関塚勇さん証言（10歳、小学校5年生、埼玉県鴻巣町）

終戦時は家族とともに埼玉県鴻巣町に住んでいた。家族は両親、姉2人、兄2人、弟2人妹と私の7人家族であった。まさしく貧乏人の子沢山であった。私は鴻巣小学校の5年生であった。父は、身体が健康でなかったため兵役は免除されていた。埼玉県大宮市の宮原にある鋳物工場に勤務していた。1時期、軍属として川口の軍需工場で働いていた。父の工場に行ったことがあったが、鋳物の型が目についた。民生用の什器を作っているようだった。父は岩手県から白くて半ば粉になった岩塩を入手し、闇で売った。闇経済がなければ生活が成り立たなくなった。隣人は農家ではないが、闇商売を大きくやっていた。

鴻巣に空襲はなかったが、熊谷の空襲や東京の空襲は見たり聞いたりした。群馬県太田市に航空機の軍需工場があったので、B29の爆撃があった。ある日、B29の約20機編隊が鴻巣上空の高高度を太田市に向かっていった。日本軍の高射砲が発砲するが、B29の高さの8割ぐらいの高さで炸裂しており、敵機に届かなかった。しかも単発的であった。また、日本の戦闘機が迎え撃とうとしているが、B29の高高度に達することができず、低いところをウロウロしていた。地上の国民は「なんだ、届かぬじゃないか」とがっかりしていた。こんな光景を何度も見た。その頃、日本軍には優秀な戦闘機も、搭乗員もすでに失われていた。

1945年3月10日は埼玉県でも空襲警報になり、定められた荒川の土手に避難した。家から約1kmの距離を避難した。当時、鴻巣の住人は家庭用の防空壕を持たなかった。東京方面がびんやり赤く染まっていた。地平線が赤く見えた。大人は「東京が燃えている」と話していた。夜明けになって、避難していた約50人はようやく自宅へ戻った。

戦後、父と二人で浅草寺に行ったことがある。省線高崎線で上野まで出て浅草に入った。汽車はとても混んでいた。ひどい状況だった。寺は焼けていなかったが、まわりは焼けていた。しかし、下町のような焼け野原ではなかった。子どもながら、東京は建て直しができるのか、いつ復興できるのか、日本はどうなるのだろうと考えさせられた。その日は家に戻った。

小学校は、先ず奉安殿のことが教えられた。木造で衣服ロッカー3個分の大きさであった。小学校の正門の左側に設置されていた。奉安殿を通過する登下校時には最敬礼が強制させられた。その中に、天皇のご真影が飾ってあると教えられた。小学校に入ると天皇の名前を全部暗記するように言われた。その時は覚えたようだが、今は忘れた。奉安殿は校庭を向いていた。校庭で儀式がある時、先生の号令で「左向け、左」と言うと、その方向が奉安殿であった。ときどき、東京宮城へ向かって遥拝もあったが、身近な奉安殿で済ませることが多

かった。軍国主義に先生はいなかったようだ。校長の朝礼の内容は覚えていない。しかし、学校に現役軍人が1人いた。その軍人は将校の軍帽、軍服、皮長靴の服装でサーベルを下げていた。いつも学校の様子を探っている眼つきだった。時々、朝礼で校長の後に何か話したが、よく覚えていない。怖い存在なので、視線があっても目礼しかなかった。声をかけなかった。軍人は何人かが交代していた。

私は、ラジオの時局放送を聴くのが好きだった。大本営や横須賀鎮守府（略称は横鎮よこちん）発表の景気のいい戦果を聞いて、勇ましいことばかり言っていると感じていた。

鴻巣に東京から集団疎開の児童が来た。宿泊は寺でない施設であった。私のクラスには約10人が転校してきた。クラスは60人学級になった。東京の子どもたちはレベルが高いような気がした。しかし、いじめはなかった。私の家に近かったT君は成績がよかった。大人になって、仕事で偶然一緒になった。いまもお付き合いしている。3年B組の時、転校生のF君とは、喧嘩をして殴ってしまった。喧嘩はこれが最初で最後である。

戦後、奉安殿には自然に誰も敬礼しなくなり、そのうち撤去された。あれほど重大であったものが。あっけなく消えていった。戦後の教科書はお古を使ったが、墨塗りではなかったようだ。新制中学校に入学できた。私は足が速かったので野球部にもいたが、陸上部の短距離で選手がいない時、よく狩り出された。野球が大好き少年であったが、敵国スポーツができるのも平和のおかげであった。

父は戦場に行かなかったが、父の兄弟は3人戦死した。二人はフィリピンで戦死した。戦死に関する情報は埼玉県鴻巣市の墓石に刻まれている。

戦争は人殺しだからよくない。再び繰り返してならない。宗教戦争が伝えられるが、宗教の目標は平和だから、宗教で戦争が起こるのは間違いである。私は、少年時代から戦争は間違いだと感じていたが、戦後になって本を読んだり、映像をみたりして勉強して戦争が間違っていると確信した。1973年に千葉に来て、いい人たちにめぐり合えて一層確信を深めることができた。

山田静子さん証言（7歳、尋常小学校2年生、北海道空知郡宇芽町）

終戦時、父は出征していた。私の家族は、弟を身ごもった母、私と二人の妹の生活であった。母は、病弱で、入院した。1945年6月に弟（父が命名した名前前は正雄）が生まれた。母は母乳が出ないため、また、ミルクの配給が滞ったため、母は米を粉にして軟らかくスープにして、赤ん坊に飲ませたが、消化

不良で弟は薬もなく亡くなった。結局、弟と父は戦争のおかげで対面できなかった。当時は戦争遂行のために、「生めよ増やせよ」の人口増加政策で子沢山の家には配給がそれだけ多かった。尋常小学校では、学芸会で「カモメの水兵さん」を歌った。また、荒鷲の歌（予科練の歌）を振付けて踊らされた。新嘗祭や神嘗祭には学校で端切りの飴が配られた。1941年12月8日の日米開戦を伝えるラジオには軍艦マーチが流れていた。その後、ラジオで景気のよい戦果を報道するラジオはいつも戦意高揚のために軍艦マーチを流していた。戦争が激しくなると、学校の先生も出征したので、女性の代用教員が採用された。教師の資格のないような代用教員もいた。ある日、代用教員が生徒に、瞑想をしなさいと言った。子どもが、ちゃんとした説明もなく瞑想ができるわけがない。私は目蓋を少し動かしたら、代用教員にいきなり後頭部を強く叩かれ、顔を机の角にぶつけ、口から血がでた。代理教員は行き過ぎた行為を反省しなかった。私はそれ以来、その代理教員には挨拶もしなかった。

1944年8月に、父が35歳で旭川連隊に召集される前は、雄別茂尻炭鉱の坑夫（採炭夫）だった。炭鉱は斜坑だけで、立坑はなかった。炭鉱労働者の子供だけで1000人を超えていたので、人口は4000人ぐらいであったと思う。大きな社宅が6箇所もあった。生活条件は貧しく、36軒に1水道の割り当てであった。1942年9月頃、父が喘息の発作を起こし休養中に、各町内の詰め所にいる20代の若者が地下足袋の土足のまま上がり込んできて「まだ働けないのか」と父に向かって言った。私は、子ども心に、この人は「なんだ、なんだ」と腹立たしかった。また、炭鉱事故は頻繁に起こった。父は2回も落盤事故に遭遇している。その一つの事故は、落盤で体が埋まったが、父のヘッドランプの光を見つけて救出された。その時、父は「先山（さきやま）がやられたぞー」という声を聞いたという。私が大腸カタルで重体に陥った時、父は勤務を交代してもらって私を看病した。その交代した労働者の作業中、鉄砲水が噴出し水死させてしまった。落盤の事故を知った近所の人が、母に、てっきり私の父が死んだと思ってお悔やみの言葉をかけてくれた。身代わりの仲間の死は心苦しかった。

父が出征した後、戦略物質が不足すると、鍋、釜、やかん等が供出させられた。残ったのは琺瑯製の鍋だけだった。父が坑夫であったとき底の深い2食用アルミ製の弁当箱も供出した。母は口に出さなかったが、こんな家庭の金属を供出させるようでは戦争に勝てないと考えていたようだ。農家の農耕馬は軍馬として徴用されたが、犬まで徴用された。ガラスには爆風でガラスが飛び散らないように紙でタスキ状に補強していた。終戦間際の7月になって、警戒警報や空襲警報がたびたび発令されたが、モンペ姿の母は防空壕に入らなかった。隣組の防空訓練、防火訓練、竹槍訓練などがあったが、母は病弱もあってほと

んど参加しなかった。警防団は、母が少しおかしいと思われていた。私は、アメリカの飛行機に強い好奇心があり、ある日の空襲警報で防空壕に入ったものの、爆音が近づくとこっそりと外へ出て米軍機を見た。3機編隊で地上すれすれに飛行していた。一人乗りの濃緑色の艦載機であった。搭乗員の顔が見えた。彼は風貌ガラスを開けており、飛行帽に風防眼鏡をかけ、白いマフラーをなびかせていた。しかし、炭鉱と人間には銃撃しなかった。それは、徹底していた。私は、空襲警報にもかかわらず防空壕から出たことで大人から「危ないぞ！」ときつく刈られた。これはわかったことであるが、米軍機は戦後、日本の復興のことを配慮して炭鉱施設、炭鉱住宅、人間を攻撃しなかった。雄別の周辺は、歌志内、芦別、平岸等は大きな炭鉱脈の上にできた町であったが、どの町も空襲を受けなかった。幸い、炭鉱周辺に軍事施設や大きな軍需工場がなかったことも空襲を誘わなかった理由だったと思う。アメリカにとっては、すでにゆとりのある戦争であった。私は、B29は見えていない。室蘭の艦砲射撃は戦後になって知った。

1943年1月頃の真冬に、強制連行されてきた朝鮮人を整列させ、朝の点呼で番号を言わせるが、1人が間違えると全員往復ビンタであった。私は、息を詰めて、その場から動けなかった。同年11月頃、やはり、強制連行された朝鮮人、日本人も体調が悪い人が呼び出され、体罰を受けているらしく、竹刀で打つ音も聞こえ、朝鮮人の「アイゴーアイゴー」と言う悲しい声は忘れられない。この後、頭をバリカンで虎刈りにされ、見せしめのために、その頭で水を汲んで来いと言われていた。

父は、人を差別しない人であった。当時、炭鉱には大勢の朝鮮青年が強制連行で労働させられていた。父の組にも、1人の朝鮮人青年がいたが、父は彼を自宅に招き、私たち家族と一緒に食事をすることもあった。正月には、餅をついて、青年に餅を持たせた。母も差別はしなかった。私は、それを当然のように見ていたが、今から思えば両親は誇れる存在であった。

父が旭川連隊に召集され、1944年10月には初年兵として北支（ほくし）の戦線に派遣された。父はすでに兵隊としては若くない歳であり、喘息持ちであった。幸い軍馬の面倒を見る仕事に配属された。父が、帰国後に戦場の話をいくつか紹介してくれた。「ある夜、上官がK兵隊に教練として電柱のある所まで駆け足をさせた。兵隊が駆け足で戻り、上官に告げた。上官は兵隊に『電柱は何と言ったか』と質問した。K兵隊は『ご苦労さですと言いました』と答えたら、上官に『この野郎』と言って殴られた」と。また、「中国の日本軍陣地で飛行機が健在であるかのように見せるために、木製の偽装飛行機を並べ、木の枝や草で覆いをかけていた。しかし、アメリカは正体を見抜いていたので、偽装飛行機を相手にしなかった」と。また、「ある日の戦闘で敵襲に会い、地面に伏せた

が、体の周辺の土に銃弾が音を立てて突き刺さった。戦闘が終わって周囲を見回すと、兵隊や軍馬があちこちに倒れていた。ここで、九死に一生を得た」と。戦地から、軍事葉書は来たようだったが、何が書いてあるのか母は言わなかった。父の兵隊としての給料は58円が送られてきていた。でも、生活は苦しかった。

食糧が統制され、食べ物に不自由するようになった。道端の食べ物では不足した。魚も漁船が徴用され、漁師も出征していたから、食べられなくなった。味噌や醤油も統制されたが、家庭で自家製を作るのも大変だった。小学校2年生の時、砂糖などもバケツで配給されていた。私の家族は少人数で配給も少なく、悔しい思いをした。麦を1斗背負って精米所まで片道4kmを歩いた。社宅の大人30-40人に混じって、夕別から妹背牛まで蒸気機関車で澱粉を買出しに行ったが、列車は満員で、子どもは機関車の先頭に座って行った。

ある日の夜、父がお世話していた朝鮮人青年が大きな黒光りする石炭原石を父の留守宅に届けてくれた。母はびっくりして、「そんなことをして、見つかったら、あなたが危険だからやめてください」と青年を心配した。しかし、青年は「大丈夫です」と答えて去った。私たちは青年の気持ちが嬉しかった。しかし、これは他人に言えない秘密であった。しばしば、二人の烏打帽の男が社宅の様子を監視していた。私は「憲兵」だと思っていたが、思想犯を取り締まる「特高」であったかもしれない。戦後、朝鮮人は強制労働から解放された。その朝鮮人青年は牛の解体をしたとき、私たちにボール一杯の肉を届けてくれた。その親切な青年の名前はわからない。

母は、健康が回復せず、覚悟を決めて私を病院ベッドに呼び、遺言とも考えられる言葉「静子、大きくなったら皆から好かれるようになりなさい」を述べた。私は、悲しくて別室に行き「お母さん」と言いながら思い切り泣いた。

1945年8月15日の玉音放送（終戦放送）は雑音が多く理解できなかった。戦争が終わったことは、戦後は母から聞いた。母は、私に「戦争は負けたよ。でも、もう灯火管制はなくなり、明るくなるよ。自由になるよ。やっとゆっくりできる。お父さんも帰ってくるよ」と話してくれた。その頃、母は重大な病状を脱しつつあった。

戦後、炭鉱出身の兵隊は続々と帰還したが、父は、戦争が終わってもその年には帰国できなかった。1946年秋に帰国することがわかり、私は、入院中の母代わりに知り合いの大人と一緒に、茂尻駅に2年ぶりに見る父を迎えた。父は真っ黒い飯盒をもって帰った。留守宅は祖母も来て手伝ってくれた。大人たちは、父を家に連れて行かず、母のいる病院に連れて行った。

父は喘息の上にマラリヤに罹患していた。しかし、入院するゆとりがなく、また採炭夫として働いた。1948年に生まれた3番目の妹は、急性肺炎になったが、ペニシリンで救われた。相変わらず、母は母乳が不足したので、私が牛乳を買

いに行った。父はマラリヤと喘息を抱えていたので、採炭の仕事はきつかった。特に発破後の黄色い刺激性の煙硝ガスは喘息の発作につながった。私は納豆売りのアルバイトを始めた。朝、社宅を訪問して納豆 30 個を売るのである。1 個 8 円で仕入れ、10 円で買ってもらうのである。これで学用品を買うことができた。お客さんにはいろんな人がいた。精神病の女性は、どんな納豆かと質問をしてきて、納豆が糸を引くのを見て「これ腐っている」と。また、同級生に家で、父親が「そんなもの要らねえ！」と。役所にいく仕事は、祖母にできないので私が引き受けた。私は学校を休んでも、いつも勉強を怠らずにいた。生活は苦しかったが、不幸と思ったことはなかった。戦後の小学校は、いい先生に巡り合えた。生徒は、授業前に教室で自由に遊んでいた。私は「みかんの花咲く丘」を歌っていたが、H先生が教室のドアまで来ていることを知らずにいた。先生は私が 3 番まで歌い終わるのを待って、教室に入るや「お上手ね」と褒めてくださった。私は、国語、社会、音楽が好きだった。1 年生の成績は優が多かったが、その通信簿は紛失した。先生から褒められ、母からも褒められたことは嬉しかった。戦時中のひどかった軍国主義代用教員を思い出した。

父は 50 歳で、雄別炭鉱を退職して、夕張炭鉱の掘進の仕事に転職したが、収入は減った。私は、夕張引越しを契機に中学校を 1 年生で中退した。私の時代の中学生は約 40 人に一人だけが高校へ進学した。彼女は教師になった。当時はまだ生活保護制度がなかったと思う。最後は、事務所の雑用をさせてもらった。父は 80 歳まで、母は 69 歳まで生きることができた。私は、中学校を中退する時、少なくとも漢字が読み書きできれば仕事ができると思っていた。1955 年ごろ、石炭は日本経済を支えるエネルギー産業であったが、事故が絶えなかった。私が北海道で働いているとき、私の語った「炭鉱職場の安全」の記事が旧北海タイムスに掲載されたことがある。石炭は重要であるが、安全で楽しい職場にしようと訴えたのだ。

1970 年に千葉に来て、不動産会社に就職した。仕事は面白かった。中学中退の学歴差別は、調理師の免許を取ろうとしたが、義務教育を終了しない者には受験が認められなかったことで初めて体験した。夕張の中学校に問い合わせ、在学証明書は発行してもらったが、卒業証明書は無理だった。その校長先生は、私の努力を評価して、朝礼の時に、先輩（卒業生ではない）が頑張っている姿を生徒に紹介したと私を激励してくれた。

私は、戦争のせいで、中学校を卒業できなかったが、民謡は頑張って道大会や、関東地区、千葉大会でも入賞したことは人生の大きな励みになった。私は、「松前江差の津花の浜でヤンノサノーエー」で始まる江差追分が一番好きだ。

日本はイラク、アフガン、ソマリアに軍事介入しながら、社会保障費を削減している。日本の教育は正しい道徳教育がされていない、同時に事実に基づく

正しい歴史教育がなされていないのは問題である。東京都は日の丸、君が代を教師と生徒に強制しているが、テレビで見た平成天皇は園遊会で「日の丸、君が代は強制してませんね」と念を押して発言していた。戦争は二度とやってはいけない。戦争は政府が行うから、税金を納めている国民が税金の使い道をしっかり監視しなければならない。これができなければ、また暗い時代が来ない保障がない。

浅利勝美さん証言（6歳、国民小学校1年生、三重県宇治山田市、現伊勢市）

私は、終戦の年に三重県宇治山田市立早修小学校に入学した。家族構成は、両親、兄、私と弟の5人である。父は製薬会社のサラリーマンであった。父は電車で通勤していた。すでに40代であったからだろうか、赤紙（召集令状のこと）は来なかったが、父母は、兵隊として召集されるのではと恐れていた。兄は、中学校1年生であったが、勉学の機会はなく、もっぱら隣町にあった横浜ゴムの軍需工場に勤労働員されていた。昼食は工場から支給されず、母は兄の弁当作りに苦労し、そして、それ以上に、息子（兄）の無事を気遣っていた。軍需工場は空襲の標的にされていたのである。

学校では、空襲は多くの児童が一度に大きな被害をもたらすので、寺などの施設に教室を分散させた。4月の入学式は学校であったが、その後、私の学級は、近くのお寺が当てられた。寺には生徒人数分の机や椅子がないので、机と椅子のない授業であった。私たちは、警戒警報になると自宅に走って帰った。空襲時は、学校で責任を取らないシステムだったのだろう。担当教諭は女性であった。私は、警戒警報が解除されても学校に戻るのには、いやだと母に駄々をこねていた。私の学校の教科で記憶のあるものは、「修身」だけである。この教科書は大切に扱うように教えられた。本を取り出すときは、頭を下げる。丁寧にめくる。しかし、肝心の中身は全然記憶がない。中身が伝わっていないのである。修身以外では、ザラザラの紙に絵を描いていた記憶しかない。

1945年になると、たびたび町の上空を敵機が飛行して行った。家には小さな防空壕があったが、春ごろからは、もう防空壕は使わなかった。防空壕では、空襲から命を守ることができないとわかったのであろう。毎晩のように空襲があったと思う。警戒警報になると、母は弟を背負い、私の手を引いて少し離れた山や川、田や畑のある郊外に逃げた。夜、寝巻を着て寝た記憶がない。B29の編隊は、四日市や名古屋に向かったことが多かったと思われる。

しかし、5月か6月だったと思うが、宇治山田市をめがけてB29の大空襲があった。宇治山田市は、軍需工場等なく、伊勢神宮の他、ほとんど民家だった。

何を目的に空襲したのか、家を焼き、人を殺すことだけを目的にしたとしか思えない。この空襲で、市内の中心部はほとんど焼け野原になり、焼け死んだ人もいた。我が家は焼け残ったが、7軒先まで焼けた。

母は防火・防空訓練に動員されていた。父は藁人形相手に竹槍で刺突訓練に駆り出された。私は母に「もう戦争いやだよ」と本音を言ったら、母は、きつい形相で「そんなことは外で言ったらだめだ。そんなことを言ったら憲兵に連れて行かれる」と諭した。そのとき、初めて憲兵が怖いと言うことを知った。父も母に「こんな訓練をしていて戦争に勝てるか」と話したが、母は「そんなことを言っているの？」と大真面目であった。母は「壁に耳あり、障子に目あり」と隣近所の人たちにも気を許していなかった。憲兵・特高による恐怖政治から家族を守りたかったのであろう。

伊勢神宮は国民を空襲から守ってくれると祈願したりする者もいたが、焼夷弾が数発落下して火災(注)になっている。空襲警報が頻繁に発令されると、父は親戚宅へ家具の疎開を図った。家具を大八車で運んでいる途中、上空を B29 が飛行していたが、1機の赤とんぼのような日本軍機が B29 に迫ろうとしていた。間もなく、日本軍機はきりきり舞いをしながら落ちて行った。私は、この光景を目撃していて、悲しみとも怒りともつかない気持ちでいっぱいになった。

配給の食糧では生活ができなかった、母は着物を抱えて買出しに行った。家の庭は、食糧確保の菜園に変わった。サツマイモ、カボチャ、トマトが植えられていた。樹木も実のなるイチジク、桃、柿が植えられていた。終戦時には、家の座敷には、収穫されたカボチャの山があった。このカボチャやサツマイモは今のようないいものでなく、しばらくは見るのもいやだった。父は、海岸に近い会社に通っていたので、時々新鮮な魚を持ち帰った。我が家の分を確保したら、残りは近所におすそ分けして喜ばれた。しかし、近所の体質が虚弱な子どもが栄養失調で死んだ。父は、酒と煙草をやらなかったため、これらを食料品などと物々交換していたらしい。しかし、戦争末期には、酒や煙草の配給などはもうなかった。

敗戦近いある夏の日の朝、母は白米のご飯を作った。母は戦争の継続を考えて、米を備蓄するために日ごろは、米はほんのわずかししか入っていない海草のおかゆを食べさせていたが、「もう、お米をとっておいてもしょうがない。みんな食べよう。死ぬときは、みんな一緒に死にたい」とぼつんと言った。みんな黙々と食べていた夏の朝の光景を、私は今も覚えている。母は、この戦争を生き抜くことができなかつたのだらう。

隣近所では、7軒のうち2軒から徴兵され、私の前の家からは、二人の息子が徴兵されて、二人とも帰らなかつた。

母は敗戦直前に「戦争に負けるとアメリカ兵が来て、日本人の男も女も殺さ

れる」と言っていた。国民を恐怖によって支配した当時の政治の恐ろしさがわかる。

1945年8月15日、両親と私は縁側に出したラジオで重大放送を聞いた。私はさっぱりわからなかったが、両親は「日本は戦争に負けた」と言ったまま黙ってしまった。私が質問をすることができないような雰囲気であった。

戦後、宇治山田市の空襲で学校も多く焼失したので、焼け残った私たちの学校の校舎で午前・午後の2部授業が始まった。生徒は、後ろの壁にくっつくほどびっしりいたので、60人以上いたと思う。当時、学校でやったことは、教科書の墨塗りと図画の教科書などは何ページも糊で貼り合わせた。何を教えられたかは、全く覚えていない。

家庭では、戦後まもなく、壁に掛けられていた天皇・皇后の写真がなくなった。我が家はいち早く戦後になった。

私は、戦争に絶対反対だ。戦前は女性に参政権もなく、しかし、戦争は女性に大きな犠牲を強いた。母は大事な時は、父に判断を委ねていた。現在は、女性に参政権がある。それだけに女性として責任を感じる。戦争はある日突然に来るものではない。少しずつ準備をして戦争はやってくる。だから、戦争の動きを小さくうちに潰さなければならない。若い世代には、政治に関心を持ちなさいと言いたい。若い人たちの問題は私たちの問題でもある。母は「戦争は絶対いやだ」と死ぬまで言い続けた。私が高校の時だろうか、「もし、また日本が戦争したらどうする？」と聞いたら、母は「二人の男の子だけでも、戦争のない国に亡命させる。そのためだったら、この家を売ってもいい」と答えた。また、私の進路について「看護婦にだけは、なっってはいけない。戦争になったら看護婦は兵隊と同じだ」と言って、私が看護学校に行くことに反対した。また、戦争は天気予報や地震の報道もさせなかった。1944年12月に大きな地震が発生し、津波も起こり、たくさんの死者がでたが、これが関東大震災に匹敵する東南海地震だったことは戦後になってから知らされたことだった。

(証言者注)

伊勢神宮への空襲については山川出版1974年発行「三重県の歴史」に記述がある。

(編集委員注)

浅利勝美さんの戦時中の体験は、2006年8月発行の東葛民主文学NO.36の「子どものころ私たちの町に戦争が来た」に読みやすい文学作品として掲載されている。この作品は、民主文学支部誌推薦作に入賞している。是非、一読を薦めます。

佐藤佳士さん証言（14歳 実業学校1年生 山梨県北都留郡猿橋町）

1941年（昭和16年）12月8日真珠湾攻撃で太平洋戦争が始まり、当初は戦勝華やかで、戦果のあがる度毎に旗行列や提灯行列があり、意気軒昂の気風がみなぎり、勉強も遊びも軍国少年の夢と希望の毎日であった。

しかし、1943年（昭和18年）2月、日本軍がガダルカナル島から撤退。雲行きはあやしくなった。母の弟である叔父がこの戦で戦死し、この知らせが届いたとき、母は、囲炉裏端で泣き崩れ、その手には叔父が転戦の時出した手紙が握られていた。

幼くして両親を亡くし母が親代わりとなり面倒をみた叔父は、1940年（昭和15年）頃20歳で出征し、中国から南方に転戦、その儘、家庭の味も知らず、遙か南方の海に藻屑と消えた。考えるとその一生は本当に哀れである。この母の姿を見たとき、私の心に始めて戦争の悲哀が感じられたような気がした。

私は1931年（昭和6年）生まれ、1938年（昭和13年）山梨県北都留郡猿橋町（現在大月市・猿橋町）の尋常高等小学校に入学し、その後、国民学校と名称が変わった。

私の家は農家であった。父は次男であったが長男が国鉄職員として家を出たため、3階建ての大きな農家に住んでいて、当初は養蚕をしていたが、食料事情の悪化に伴い、桑畑を麦や芋畑に変え、50アールばかりの水田と八百屋を兼業していた。

父は年齢的にも応召の対象にならなかったもので、家族は祖母と両親、妹3人、私と7人家族であった。

さらに、この年、1943年（昭和18年）5月、アリューシャン列島のアッツ島で山崎部隊2千6百有余名が玉砕し、戦いは敗色に傾いていった。私の父方親戚の方がこの中にいて、国民学校の校庭で盛大な慰霊式が行われ、町の有力者、小学生など数百人が参加し殉国の志を称えて霊を慰めた。私は、子供心にも悲しみを乗り越えて立派な軍人となり鬼畜米英と戦うのだ、との思いを強くしていった。

この年、食料不足は一段と厳しくなり、雑木林など開墾して少しでも畑地を増やそうと、我が家では父は暗いうちから、星の出るまで働いた。私も小学生ではあるが、農繁期休みが多くなり、勉強よりも登校するとすぐ農家の手伝いが多くなった。

部落の家からも2人、3人と応召が続き、三嶋神社の前で武運長久を祈り、国防婦人会の人や小学生の旗行列に見送られ、猿橋国民学校のブラスバンドによる「勝ってくるぞと勇ましく・・・」の軍歌とともに、猿橋駅に向い、駅前広場では「天皇陛下万歳」と三唱の声に送られながら出征して行った。

製材工場に勤め、私と一緒に模型飛行機を作ったり、当時としては珍しい貴重なラジオなど組み立てて、微かに聞こえる音声を一緒に聞いたりして喜ぶなど、子供好きで私にとっては友達のようなおじさんが近所にいた。

この方も、大勢の旗行列に見送られて出征して行ったが、ついに帰らなかった。千人針の襷をかけ、猿橋駅を出発する列車のデッキから敬礼していた姿が今でも眼に残る。残された奥さんが、生まれたばかりの赤ちゃんを抱きながら泣いていた姿も忘れられない。

1944年（昭和19年）本土空襲が本格化し、食料は益々逼迫し、私より1-2歳下の集団疎開児童が東京からやってきて、町の旅館で生活を始めた。橋の欄干から家庭内の鍋釜まで余分の金物は全て供出「欲しがりません・勝までは」が合言葉となった。もはや平時の雰囲気は全くなかったこの年、私は初等科を終わり、父の意向もあり、農業関係の学校に行くことを考え高等科1年生となった。13歳のときである。部落では、私が最上級生であり、下級生10余人を連れて1km程を登下校した。「見よ東海の空明けて・・・」と軍歌を歌いながらの登下校であるが、戦いはまだ身近な出来事とは感じなかった。

しかし、学校は、勉強ではなく心身を鍛えて、立派な兵隊さんになることが目的であり、朝礼では、天皇陛下のご真影がある奉安殿に三拝後、カーキ色の国民服に戦闘帽・巻脚絆姿の先生から戦時高揚の訓示が長々と続き、一斉に軍歌を合唱した。私など、ときに強い日射で貧血を起こし、医務室に寝かされ、こんなときは先生に鍛え方が足りないによく怒鳴られた。多分、修身の時間と思うが、教室の廊下に正座させられ、教育勅語と戦陣訓・歴代天皇名等を暗唱させられた。しびれと痛さで少しでも動いたり、言葉につかえたりすると、叱責の言葉がとんだ。多分、精神修養と国家への忠誠心を植えつけるためだったと思われるが、当時の少年の心では、何の疑いもなく一所懸命に覚えた。体操の時間にはグラウンドで、銃剣に見立てた竹竿や丸棒を構えて、突撃と突きの練習を、へとへとになるまでやらされた。さらに、辛いのが校外マラソンである。当時は靴など無いので草履か裸足である。舗装もされていない道を走るので、石ころで親指がはがされてその痛さといったら泣きべそをかきながら走った。

こんな時、いつも励ましてくれたのが、2年3年のとき担任だった女学校出たてで、色の白い美人の山本先生で言葉をかけてもらうたびに勇気が湧いた。後年、国民学校時代の同級会があり、そのとき、先生が見えられ、私の東電姉崎火力発電所技術課副長の名刺を見て、大変喜んで頂き大感激であった。あれから四十年余り先生のご存命を願うばかりである。

私の家は農家であったので、比較的食べ物には恵まれていたが、それでも、白米のご飯は、盆と正月だけ、麦が6分入りで芋やカボチャの入った今の感覚では本当にお粗末な弁当であるが、街通りの友達には羨ましがられ、ガキ大将

には半分巻き上げられたりもした。私の場合、空腹に悩まされることが無かっただけ幸せであった。しかし、困ったのが衣類であり、つぎはぎの折り目には虱が湧き、石鹼等無いので母は砂でこすって洗濯するが退治できない。いつもムズムズするし、虱退治が大変であった。

1945年(昭和20年)は、まさに激動の時代であった。戦況は益々末期的病状を呈し、日本各地の空襲は激しさを増し、隣組のおばさん達に混じって、私もバケツリレーの消火訓練に精を出した。父が屋根に上り、バケツで水をかけている姿が今でも眼に残る。

この頃、私は満州に憧れた。満州は無限に広がる王道楽土の土地である。ここ数年14~16歳の少年による満蒙開拓少年義勇軍が結成され、猿橋国民学校でも確か2~3人が応募し、校庭で壮行会が行われた。

満州鉄道のアジア号が荒野を疾走するニュース映画に刺激され、開拓に夢をかけアジア民族の共栄をはかると先生達にも激励されて、応募の希望を父に話すと猛然と反対された。今考えると父は中々冷静な性格だったので、わが子を手放したくない親心ばかりでなく、戦況の不利をも予感していたのではと思われる節もあった。後年、妹の話によると、父は、ほとほと手を焼いていたそうである。少年航空兵なども、とんでもないと言われ、考えの違う父を残念に思ったりした。

農家や、町工場で女工さんの手伝い等と、形ばかりの高等科1年が終わり、同級生の何人かは甲府の玉幡飛行機学校に入学した。父は「いずれ戦争も終わり、お前達の時代には工業が盛んになる」と、山梨県立谷村工業学校に進学を勧め入学した。戦前、この地は機織業が盛んで、父も、やがて地場産業が復活すると思ったのかも知れない。

東京大空襲のため、駿河湾から進入したB29の大編隊が青空に銀翼をきらめかしながら飛行し、サイレンが鳴り響き、夜は暗黒の灯火管制である。八王子大空襲のときは夜通し東の空が真っ赤に染まり、翌日焼けた衣類を纏った被災者が亡者のように避難してくるのが見受けられた。8月13日、B29とグラマン戦闘機によって、3kmばかり離れた隣の大月町が爆撃された。轟音とともに黒煙が上がり我が家の直ぐ上をグラマンが旋回しながら掠め、機銃掃射の葉きょうがバラバラ降ってきた。ゴーグルをかけた操縦士が下を見ているのがハッキリ見えた。記録によると死者54名、重傷者48名、民家29棟が全壊、特に悲惨だったのは年端もいかない女学生24名が、倒壊した校舎の建物や土砂の下敷きになり、手足をもがれた少女、腸がとびだした少女が「お母さん・・・」と泣きながら息を引き取っていったと記してあった。涙無しには語れない。

ドイツが降伏し原子爆弾が投下され、ようやく8月15日戦争が終わった。

私も近所でラジオのある家に皆と集まり、玉音放送に聞き入った。鯉幟のように高いアンテナ線は風にゆれ玉音は遠くなったり、近くなったり、よく聞きとれない。部落長をしていた父が「戦争は終わったよ」と叫んだが、「陛下の励ましのお言葉である」という人達もいて騒然となった。しかし、漸く敗戦が理解され、おばさんたちが一斉に泣き出した。

私は、この一瞬まで日本が負けるとは思わなかった。いつか、神風が吹くと思っていた。しかし、これ程まで何故信じ込んでいたのか。今考えると、当時の教育の力がいかに強く、又、批判の無い社会環境に染まってしまったからではないかと思う。

翌日から明るい電気の下で夕餉の食事ができるようになったこともあり、いつしか、軍国の心は無くなり、勉学に興味湧いていった。これも、一心に働く父の姿が私の心に勤労の鏡として、反映していったからかもしれない。

思えば、どうしてこんなバカな戦争になったのか。日本が明治以来西欧を目指して、急激に列強の仲間入りを果たそうとしたのが遠因ではないか。出る杭は打たれる。

中国の權益を巡って米国と対立し、経済制裁により石油の路を断たれたのが戦争に走ることになったというのが直接の原因といわれる。

しかし、当時、世界的な大不況で東北地方の人達等の極貧等が政治不信に繋がりが、政党政治を弱体化させ、軍部の増長と独走をもたらしたことが底にあったのではと思う。昔も今も、本当に困る人達を助け、社会の不安を取り除くことが大事ではないか。

後年、写真や、ニュース映画で広島・長崎・東京の焼け野原・累々と続く焼け焦げの屍を見て、その無残さに胸もつぶれる思いであった。また、今尚、世界各地でテロや争いが絶えない。日本は歴史を教訓として、忍耐力をもって平和外交を推進しなければならない。どんな理由があろうとも戦争は人類の悲劇であり、絶対に避けなければならないと思う。

退職後、私は写真を趣味とし、中国も何回か訪れたが、見渡す限りの山岳に天まで耕す広大な棚田と、大地に生きる少数民族の人たちの姿を見て、そこに人間の平和な原点が見えるような気がした。(戦時下の少年時代)

荻田保元さん証言（11歳、小学校5年生、徳之島）

私は、終戦時に徳之島の小学校5年生であった。家族は母と兄と私の3人であった。父は、私が2歳の時亡くなった。父は大阪市役所の職員であった。犬田布（いぬたぶ）国民学校に入学し、高等科2年生から新制中学となった。国

民学校は、天皇陛下のご真影や教育勅語等を奉納している奉安殿と言う建物があり、祝祭日には校長先生が恭しい所作で教育勅語を拝読していた。母親たちは愛国婦人会や国防婦人会の大きな文字入りの襷（たすき）を掛けて、出征兵士のお見送りに参加したり、「立ち木打ち」（大木の幹や藁人形を打ち、剣道の練習のようなこと）をしたりしていた。

松の木の根元を削って松脂（まつやに）を採取し、容器に入れ芯になる紐を入れ、点火すれば照明になった。家庭用の風呂釜（五右衛門風呂）や鍋釜、農具の鍬、鎌等鉄製品は供出させられた。食用作物の米、味噌、黒砂糖なども供出させられた。

戦争中に聞いた話では、鹿児島県知覧航空隊基地から沖縄に向けて特別攻撃隊が出撃した。特攻機は島伝いに飛行したが、出撃時にもらった花束を島々の上に投下したらしい。また、不時着を予想して徳之島に突貫工事で飛行場が建設された。いつもは友軍機が上空を飛行していたが、敗戦色が強まると、友軍機は姿を消し、米軍機に変わった。私は、飛行機は友軍機だと信じていたので、ある日飛行機に手を振っていると、それは米軍機であった。1945年4-5月頃、海の彼方で艦砲射撃の音を聞いた。これは、戦艦大和が沖縄に向かう途中で米軍機によって撃沈されたときのように思う。撃沈された戦艦大和の乗組み人の遺体が島に漂着して、茶毘に付されていた。徳之島は、地上戦はなかったが、空襲はあった。友だちの兄弟が不発弾に触れて、死んだ。戦後、不発弾があちこちにあった。私の知り合いで戦死したのは従兄弟など5人ぐらいである。徳之島の岬に「昭和20年(1945年)4月に撃沈された戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士の慰霊塔」がある。

「わだつみの声なりしかと遠き日の海鳴り未だ耳に残これり」

1945年8月15日、戦争が終わった。私は農作業中なので、天皇の放送は聞いていないが、戦争が終わってほっとした。

「脱穀機の音に負けじと話す声「戦負けた」と仕事続く」

小学校5年生の夏、まずは教科書に墨を塗った。そして、製本されていない印刷されただけの紙を自分たちで切り分けて教材を作りながら勉強した。「これからは先生も皆さんと一緒に民主主義と言う教材を勉強します」と言われたことがとても印象に残っている。復員兵士や外地からの引揚者等で周りが賑やかになったが、住民が増えると食料不足や失業者が増え、再び離島する家族もあった。

戦後、島には片腕、片足、片目を失ったり、顔や鼻に傷が残ったりする傷痍軍人たちがいた。いまでこそ、義手や義足などがあるが、当時はどんなにか不自由であったかと心が痛む。

終戦から半年後、日本は降伏したので、北緯29度以南はアメリカ合衆国によ

る信託統治下に置かれることになった。ララ援助物資（粉ミルク、クラッカー、チューインガムや七面鳥の缶詰、毛布、草色の大き目の軍服衣類等）が島民の窮乏を救った。島民の生活は少しずつ変化して行った。徳之島は鹿児島県であるが、本土から切り離されてしまった。本土への渡航は禁止された。鹿児島へ密航する事件もあった。しかし、沖縄との通行は自由であったから、沖縄糸満の漁師家族が浜にテントを張って漁の仕事をしていた。貨幣はB円と言われる米軍の発行する軍票であった。当時、1ドルは360円の固定レートであったが、B円（注）は120円で1ドルだった。

「敗戦のうきめ信託統治とふ歴史の在りし故郷の島」

高等学校は最初、伊仙村立実業学校（青年学校）と言われていたが、学制改革により新制伊仙村立農業高等学校となる。アメリカの信託統治なると学校は「村立」から「臨時北部南西諸島（大島郡のこと）政府立」学校に、さらに「琉球政府立」学校と変わった。日本復帰に伴い鹿児島県立学校となった。

高校時代は、大島郡島内が祖国復帰運動に燃えていた。各学校でも弁論大会等が行われていて、私も多感な思春期にあり、「平和」と言うことに大きな関心があった。熱気に押されて大会に出場したことを昨日のように思い出される。復帰運動のリーダーは泉芳朗氏と東京の昇曙夢氏の二人の強力な指導があつて祖国復帰の早期達成ができたと聞いている。復帰と同時に本土への渡航も自由になり、都会に憧れ、大阪で就職し、そして東京へと転勤し、社会人として働いてきた。

今も、世界のどこかで争いが絶えない！戦争は多くの人々の生命を奪い、不幸に陥れて終わると思う。人間が人間らしくおのおのが希望を持って生存できるような「平和な世界」になってほしい。少なくとも大きな惨禍をもたらす核兵器をはじめとする大量殺戮兵器の廃絶と国際連合を中心とする話し合いの場を大事にして行くことが急務である。

日本国憲法の戦争放棄の条項を世界共通の理念にして進められることを願う。
「小学校入学から終戦、米国による信託統治時代の記憶」より
(証言者注)

B円は、1945年から1958年9月まで、米軍占領下の沖縄県や鹿児島県奄美大島（トカラ列島を含む）で、通貨として流通したアメリカ軍発行の軍票である。正式名称はType B Military Yenで、Yen B type、つまりB-yenとなった。B円は、本土ではほとんど使用されなかった。(Wikipediaより)

鈴木けい証言（9歳、小学校4年生、北海道網走郡高野）

私は、1945年8月15日の敗戦を、北海道の網走郡高野と言う山深い開拓農村で迎えた。小学校4年生のときだった。父は高野小学校の校長であった。住宅は学校の一部にあり、いくら寝坊しても遅刻することはなかった。吹雪の日も雨の時も心配はなかった。私は、2歳年上の兄、2歳年下の妹と父母の5人家族で自然の中で幸せな日々であった。児童数は50名足らず複式小学校で、小さな集落で、学校は部落の中心となり、行事の殆どはここで行われた。子供たちもよく遊んでいた。校庭南端には、天皇の御真影を入れた奉安殿があり、登校下校時には、最敬礼をさせられていた。そこには教育勅語も入っていた。卒業式など学校行事がある度に父は、子供達に「起立、宮城遥拝」と号令をかけ、白い手袋をはめ丸い筒から教育勅語をとり出し、恭しく一礼して読み上げていた。子供たちの中には緊張と栄養不良のためか、バタンと倒れる者もいた。

1944年、アメリカの偵察機が襲来するようになり、警戒警報が美幌町の役場から聞えて来ると、子どもたちは大きな防空壕へ大急ぎで入ったり、放課後などは芋畑やビート畑の畝の間に身を伏せたりして飛び去るのを待った。美幌には海軍の飛行場があり、米軍の重点攻撃目標の一つだったそうだ（証言者注：アメリカ海軍記録より）。

学校に部落の人達が頻繁に出入りするようになると、軍人も来た。ある時長い剣を下げピカピカの長靴をはいた憲兵がやって来て、足を揃えて敬礼し、剣をジャンと鳴らして、「自分は厠へ行きたいのであります。」・・・私たちは、驚いた。隣のお姉さんは美幌町の憲兵の家へ女中奉公に出ていた。

私は軍国少女というにはまだ幼かったと思いますが、小学校に入学するや「ヘイタイ、ススメ」を学び、兵隊さんを称える歌を歌い、出征する兵隊さんを日の丸の小旗を振って送った。千人針の腹巻を母と一緒につくった。戦地の兵隊さんに慰問文も書いた。戦争に対して批判などなかったと思う。「戦争批判」をすれば「非国民」、「国賊」と言われ警察に捕まる時代であったから…

村の少年（16歳位）達も予科練を志願して出征して行くようになった。見送りの人たちへの少年の挨拶は、父親が耳元でささやく言葉を涙ながらに復誦するものであった。幼い少年には急な親との別れ、戦場への不安、心の準備も出来ていなかったであろう。私は、ただただその光景を忘れることができない。ただただ見つめていた。

村には神社は有ったが、神主さんがいない。父はクリスチャンでしたが、国策に従って神主の資格を取り神前で兵士の武運長久を願って、祝詞（のりと）を唱え、送り出していた。

北海道へお空襲を耳にするようになり、村人が学校に集まり、我々が敵と戦

うにはどうするか、長老（区長）が「もし、この村に戦闘機がやって来て、落下傘部隊が降下してきたら、敵が着地した時必ず転ぶはずだから、自分はさつと後から手拭で目隠しをして竹槍で刺し殺す」といきり立っていた。毎日竹槍で「ヤーヤー」と相手を倒す訓練をしているのだから、当然かも知れない。それ以外に武器などはないのだから……。その時、父はどのような顔をしていたのか思い出すことが出来ない。米兵は自動小銃、竹槍で勝てるわけがない。しかし、政府の圧制のもとこれでも勝てると信じ込まされていたのだ。

1945年8月15日の終戦当日、学校は夏休みであったので、家族でラジオの前に座り、天皇のチョットおかしな声を初めて聞いた。父の説明で敗戦を知った。父母は黙っていた。私はさすがに脱力感で、その日は兎の飼育係であったが、餌をやらなかった。父は、「この兎は寒いシベリアの兵隊さんに毛皮をとって送るんだよ」と言っていた。その後のどうなったのであろうか。とにかく、兎は繁殖力があり、一度に5～6匹の子を産み、たちまち100匹位にもなり大変であった。

終戦を知った村人も学校に集まって来た。「これから我々はいったいどうなるんだろう」と不安を募らせていた。父は「アメリカはクリスチャンの国であるから、みんなが心配するような野蛮なことはしないから安心して下さい」と話した。ところが、隣家のおじさんが自宅から鋤を持ち出し、血相変えて「殺してやる」と怒鳴り込んで来た。彼は息子の戦死を知らされたばかりであった。それに、私たち姉妹にとって毎日のように野山を駆け回って遊んだり、御飯を一緒に食べたりしていた親友の和男さん、静ちゃんのお父さんであった。今思い出しても、親の悲しみ、怒りが胸にせまって来る。父も悩んだことと思うが、母と二人三脚で生きぬいて来たのだと思う。

終戦を境に、私達家族と村人の立場に変化が起きて来た。食糧の配給は不十分であったから、母は着物、帯、絹糸と芋、麦、野菜等と交換してもらいに出かけた。母は「足元を見られて…」と嘆いていた。私のたった一枚の花柄の着物もわずかな食糧に代り、悲しくて泣いてしまった。

それから約20年後「網走刑務所番外地」（映画）で有名な網走市で終生の友となる松村文儀・キサ夫妻に出会った。それは平和委員会主催の「網走の空襲の記録 1945年7月15日」の集まりであった。

松村さんは当時20歳、5,6トンの勇勢丸8小手練船9に5名の漁夫と共に出漁していた。網走の前浜2km位の所である。朝9時頃から敵機が知床半島の方向から回り込み、三回にわたり、襲いかかり機銃掃射を受け、その時2人が即死した。戦闘機はシコルスキーかグラマンだったと言われている。亡くなった菊本元一さんは、背中から腹にかけ撃ち抜かれ、腸が飛び出していたそうだ。「腸を腹に押し込み、晒でぐるぐる巻いて担架で運んだよ。」と犠牲者の妻に告げた。

4人の子供と5人目をお腹に宿した妻は「あんちゃん、父さん生きんもんだろうか」と担架にすがって、松村さんに何度も聞いて来たけど「腸わたが出てしまっているのに、生きるわけないべな一…」と答えるしかなかった。

松村さん自身も右足の膝の上部の肉をえぐり取られた。いく針か縫ってもらったそうだ。今もその傷跡は、はっきり残っていた。この日網走では4機襲来14名が死亡、北海道全体で1500名が死亡したといわれている。終戦丁度1ヶ月前のことであった。

松村さんは「ああ戦争とは、こういうことなんだ。戦地では死んだ人がゴロゴロしているんだろうな一、今でも菊本さんの死を思い出すと体がブルブル震えて来るんだ。あまりにも悲惨な姿を見てしまったからな一。オレはどんなことが有っても戦争には反対していく。平和を守る為に頑張ると決心しているんだ」と話していた。

私は松村さんの優しく、素朴で意志の強さに大きな影響を受け、日本の戦争と平和、ひいては世界の平和へと目を開くことが出来た。

終戦当時、松村さんは日本が戦争に負けるとは全く思っていなかったけれど、空襲の恐怖から解放され、ほっとした、まして1週間後には出征することになっていたの命拾いをしたと思ったそうである。

私も、松村さんには命があったからこそ、幸せな家族を作ることが出来た。平和運動を続けることが出来た。平和ほど尊いものはないと確信した。

最後になるが、あの戦争を父はどう考えていたか聞いておかなかったことが悔まれる。幸い私の身内には戦死した人、戦災に会った人はいなかった。父はこの体験を通して、平和に対する願望は強かったように思う。戦争に反対し体を張って戦った人々がいたこと、又そのような政党があったことをとても喜んでいた。

2004年6月にノーベル賞作家の大江健三郎、井上ひさし、澤地久枝、三木睦子、加藤周一、小田実、奥平康弘など著名な9名の方々の呼びかけで憲法9条を守る会、即ち「九条の会」が全国に結成された。千葉には千葉市「ちゅうおう・九条の会」を2006年6月に結成した。私もこ会の一員として、戦争のない平和な暮らしを願って関って行けることを嬉しく思っている。

村田けいさん証言（3歳、茨城県東茨城郡小川町）

私は1942年8月15日生まれで、1945年8月15日の終戦時はちょうど3歳であった。戦時中の記録は明確でないが、既に父や兄がなくなったので私が述べる。私の家の家業は当時から田畑を所有する農家である。家族構成は、両親、

祖母、子ども 8 人の 11 人家族である。私は末っ子である。私の家の防空壕は畑の茶の木の下に掘られていた。家族が収容できる大きさがあつた。ときどき、私も壕に入った。祖母は隠居して、私の家の近くに住んでおり、防空壕は利用していた。

父は 40 歳代であつた。戦争に行っていないようであるが、理由はわからない。ただし、伯父は出征しており、戦後、ひょっこり復員して来た時、畑に出ていた父に伯父の帰国を知らせに行ったことがある。近い親戚で戦争に行ったのは、この伯父だけだと思ふ。

私の家は、百里の航空隊まで歩いて 30 分ぐらいの距離にあつた。そこに兵隊が駐屯していた。私は幼いので、兵舎や兵隊たち飛行機の記憶がない。ある日、どこかで空襲があつたらしく、事件後に村人たちが様子を見に行った。私は、兄の背に負われて現場に行った。鉄兜を被って、ゲートルを巻いた兵隊が一人、木の根っこに頭を載せて死んでいた。死因は知らない。

戦後、兄や私たちは百里の航空隊の防空壕跡地に行っている。中に囲碁の石や金属片が残されていた。兄は、航空隊兵舎跡地に羽毛布団や蚊帳、ハンモックがあるのを見つけ、羽毛布団を家に持ってきた。私は、その布団を使ったが、カバーの布の目が粗いので羽毛がはみ出していた。それを引き抜いて息で吹き飛ばして遊んだ。

現在、私は千葉市美浜区の「花の輪、ライフツール千葉」でボランティアをして社会にかかわりあっている。

戦争は、戦後、戦争の事実を学んだり、最近でも戦争のテレビで見たりしているが、悲惨である。だから、私は戦争に反対する。

(編集委員注)

百里航空隊は、正式名称海軍百里原航空隊と言う。1939 年に白川村と橘村にまたがって設置され、1944 年に滑走路延長されている。終戦時には米軍と空中戦も展開している。戦後、自衛隊が発足して、現在航空自衛隊百里基地となっている。

予科練で有名な海軍霞ヶ浦航空隊は、1921 年阿見町に設置された。現在、航空隊跡地を陸上自衛隊が使用している。

(3) 軍隊・軍属・軍関係経験

a. 外地 (8 人)

大塚栄三さん証言 (25 歳、軍隊経験者、中国内蒙古、千葉市新町出身)

私は、1920 年千葉市寒川中宿 (現在、寒川神社付近) で生まれた。家族は、

両親、子ども 5 人で私は二男である。父は、漁師で海苔、小魚、エビ等を採って、エビは問屋に出すが、それ以外は母が自ら行商して少しでも家族のために利益を上げようと努力していた。

父は出征していない。長兄は、1935 年佐倉連隊に召集され、連隊長山口部隊長当番となった。これは兄の板前技術が功を奏したものである。軍曹に昇進して戻ってきた。この間、兄は在郷軍人会や青年学校教官を務めた。再び召集されるが、兄の会社が、会社の青年学校で教官をできる者がなくなるので、兄の召集を取りやめて貰いたいと陳情して、しばらく会社に戻った経緯もある。兄は、その後満州に召集され北京停車場司令部にいて、私の列車をいち早く見つけ中国北京で 4-5 年ぶりに再会した。弟は、千葉師範学校 5 年生であったから、兵役もなく、学徒出陣、学徒動員もなかった。弟は戦後、師範学校を卒業して教師になった。妹たちも直接戦争に関わりがなかった。

私は、千葉市立高等小学校の第 1 期卒業生（1934 年）である。当時は、千葉市立の小学校は、富士見小学校が第 1 小学校、本町小学校が第 2 小学校、寒川小学校が第 3 小学校と番号で呼ばれていたが、なぜかその後、できた登戸小学校と院内小学校は番号で呼ばれなくなった。私は、その後夜間の実業学校で勉強した。そして、蘇我駅近くの植草鉄工と言う鍛冶屋の工員となった。当時、五田保今井町には澱粉工場が沢山あって、鍛冶屋は仕事があった。私はここで鍛冶屋の仕事を覚えたことは将来大変役立った。1940 年 12 月 15 日召集された。近所の人たちが万歳を三唱してくれたが、私は何も言わず、ただ頭を下げていた。召集部隊名がなく近衛騎兵隊と言われたが、小石川の後樂園に集合させられた。ここには約 300 人の初年兵が集められていた。ここで支給された軍装品は、満州防寒着、満州防寒靴、歩兵銃等であった。ここで私物は付添の家族に渡して別れとなった。完全装備でさらに編上靴を担いで芝浦埠頭まで行進させられた。この時、自動車で兵員、装備を輸送できなければ、負け戦になると思った。貨物船の船倉は 2 段になっていたが、ベッドもハンモックもなかった。竹のアンペラの上に毛布を敷いて寝た。東京湾を出ると、船に慣れない者は嘔吐を始めた。船には 1 時間交代で歩哨が立つが、船酔い者ばかりで、歩哨に立てる者がおらず、漁師出身の私が、一晩続けて立ったことがあった。さすがに眠かった。この時、私の貢献に対して、上官の小沢曹長と菊池軍曹も評価してくれた。敵の潜水艦、飛行機の攻撃を避けるため、瀬戸内海を通過して、糖沽（タンクー）に到着した。

陸に上がると兵隊たちは元気を取り戻したが、私は逆に病気になり、さらに悪いことに B 型パラチフスが部隊に伝染した。私は真っ先に感染し、60 人位の患者は陸軍病院に収容された。本隊は、ソ連国境が危うくなり、我々を置いて、先に満州に向かった。本隊から私に、病気回復後、兵隊を引率せよと「輸送指

揮官」を任命されていた。1 週間の療養を終えて、牡丹江近くの一面坡（イーミエンボ）に駐屯する本隊に復帰した。この途中に兄に会うことができた。本隊に到着して「全員無事に連れてまいりました」と報告すると、本隊上官から「ご苦労であった。しばらく休養して行け」と言われた。ハルピンビール会社に将校用の官舎施設があり、そこで「当番長」の肩書で約 1 年も過ごした。1946 年内モンゴルの関東軍戦車第 1 師団に配属された。この師団は先に行った習志野第 13、14 連隊と後から行った習志野 15、16 騎兵連隊と私たちが召集された第 71 機甲連隊等からなった。騎兵は軍馬によるのではなく機甲車両であった。機甲とは装甲車であって、戦車はなかった。戦車が必要な場合は他の部隊から派遣してもらっていた。ともかく関東出身者のみの関東人部隊で心強かった。

さて、1940 年から 1942 年ごろ北支包頭（パオトウ）に駐屯していた時は、「匪賊の討伐」に従事した。彼らは馬で出沒し、我々が出かけた時にはもう居なかった。我々には、馬がなかった。車両しかなく、戦闘になると戦車隊に協力を求めた。

ところが、1945 年 3 月、終戦間近に師団は本土防衛の命令があり、相模原へ戦車 15-20 両、車両数百台、兵員約 12000 人が日本に戻ることになった。満州で日本軍に対峙していたソ連軍は、4 月に一気に満州に侵攻した。機甲師団は陸路でプサンまで、そこから兵員を先に門司港に上陸させ、次は戦車と車両を貨物船に積んで門司に向けて航行中、友軍機が門司は米軍の空襲中で入港不可であるから、行く先を変更しろと連絡があった。いったんプサンに帰港し、次に新潟港を目指した。新潟では信濃川に上る順番を待って、接岸したがクレーンの操作をする沖仕が出征しているために不在であった。私は、鍛冶屋でクレーンを使った経験があったので、「自分がやります」と名乗り出た。戦車（注）は重いので、気をつかったが、クレーンの重量制限（7.5t）は安全率が掛けられていることを承知していたので、無事に全車両を下すことができた。機甲師団は無事帰国したが、残った歩兵師団は日本軍降伏後、ソ連の不法な捕虜抑留と強制労働に使役された。車両は相模原部隊により海岸線に配置し、要員は栃木県下都郡赤津村の小学校に駐屯した。小学校の教室は生徒が半分しか使えなかった。まもなく終戦となった。（終戦の放送はどのように聞かれましたか。上官や同僚はどんな感想でしたか）千葉に戻る。家の周りは焼けて残っていたが、女子師範学校のあたりは焼失していた。千葉病院は焼けていた。後ろは広場になっていたが、ここに避難していれば、犠牲者が多く発生したはずだ。

私が、千葉市の鍛冶屋で働いていた時、国産の新潟鉄工等の工作機械もあったが、道具はアメリカ製（外国製）が優れていた。たとえば、US STEEL と刻印がしてあった。工作機械のバイトは、日本製は 10 円で、アメリカ製は 20 円であっても切れ味が違った。この時、職工の日給は 1-1.5 円、土方は 60-80 銭

であった。基礎的な技術力では日本はアメリカに遅れていた。

戦争はやむを得ないかもしれないが、紛争は話し合いで解決するのがいいと思う。戦前・戦中は軍国主義で話し合いができなかった。今日の政治は話し合いで進められている。

(証言者注) 戦車

私、は戦車学校にも行っている。そこで、戦車の操縦と整備を勉強したことがある。北支の寧安でも戦車操縦と整備を学んだ。95式軽戦車は3人乗りで約5t重量、78式中戦車は5人乗りで約10t重量である。戦車は3mmの隙間から前方を覗き見るが脇と後ろは見えない。3人乗りの場合、車長が足で運転手の左右の肩をたたき、進行方向を指示し、砲手に伝声管で射撃を命令する。

藤代喜一さん証言 (23歳、軍隊体験者、中国山東省及び済南出征)

私は中国に戦前3年、戦後8ヶ月いた。戦地の体験はわが部隊の故柏熊静元中隊長(陸軍大尉、銚子市出身)が編集した「泰山」に「瑠璃廟溝の激戦」のタイトルで詳細に記した(p274-p286)。戦闘の場面は生々しく描かれている。また、指揮官に対する不満、戦争の虚しさを伝えている。この本は公民館などにも置かれている。

私は検見川の漁師の子どもに生まれ、貧しさのゆえに小学校卒業と同時に親父と海に出た。私は小学校時代優等生で通したが、中学校へ進学できなかった。文学サークルに入ったこともある。20歳で召集され、佐倉連隊で8ヶ月訓練を受けた後、中国の前線に送られた。検見川町で同時に徴兵された5人のうち2人は召集解除になった。うらやましかった。当時、私は単純に国のために死のうとは考えていなかった。新兵は古参兵から軍人勅諭や戦陣訓がすらすら言えないと顔がはれ上がるくらい殴られた。私は暗記力があつたので、殴られることはなかった。ある日、古参兵が新兵をひどく殴つたので、新兵約30人が無言の暴力反対のストライキを実行した。つまり、全員が兵営に入らなかつたのである。その後、その暴力古参兵から報復もされず、上官から首謀者を探して懲罰してくることもなかつた。軍隊では問題を起こすと上官の責任が問われるから、不問にされたのである。よく「上官の命令は天皇の命令だ」と聞かされたが、私は歩兵学校教官であつた人から「上官の官がつく身分は伍長以上である。それ以下の古参兵が殴るのは陸軍刑法に違反する。それは私的制裁である。」と聞いて感心した。無常な陸軍のなかにも一条の論理を発見した。

中国戦線でも同じ部隊である。あるとき新兵が暴力古参兵の顔を銃剣で刺した事件があつた。古参兵は急におとなしくなつた。つまり、古参兵が強いから

威張っていたのでなく、背景に陸軍が味方をしてくれるはずだったが、彼が孤立していることを自覚したのである。中国では戦闘が繰り返された。ある日、田留荘での戦闘で、その古参兵が被弾して負傷したが、誰も救助をしようとしなかった。彼が死んだことがわかると、誰からともなく「野郎、よく死んでくれたなあ」という話になった。これほど日本軍は腐敗していたのである。また、近距離の中国軍陣地を爆破するために 15cm 径の榴弾砲をほぼ水平に撃ったために先にいる日本兵の頭をふっ飛ばしてしまった。戦闘に慣れていない上官が指揮した結果である。このように不合理なことが戦場で起こっていた。私はそのとき手榴弾の破片で脇腹を負傷したので陸軍病院に連れて行かれた。

北支派遣軍と言った細川中将の配下に属した。この中将は敗戦となると、蒋介石軍に日本の戦車と航空機を与えて、自ら戦犯になることを逃れたと言われている。この中将はよく部下に「上御一人（かみごいちにん、天皇のこと）を除いて尊敬できるものは誰か」という質問をしていた。「東條英樹大将」と応えると怒っていた。つまり中将は上官である陸軍大臣を尊敬していないのである。私は中将付の 4 人の当番兵をよく知っていた。あるとき、当番兵が禪（ふんどし）にアイロンをかけていた。誰のかと聞くと「中将閣下の禪だ」と言った。中隊の食糧のうち、米は日本米であったが、副食は現地で調達していた。しかも、水汲み、料理は中国人にやらせていた。その報酬はどのように払われたか知らない。我々は侵略者であった。ある日、村の掃討作戦に出かけ、村長を捕らえ、八路軍の居所を教えろと拷問し、結局殺してしまった。翌朝、村人たちは白衣に身を包み、村長の遺体を担ぎ、日本軍の中を通過していったが、日本軍は抗議の葬儀に手が出せなかった。

しかし、私の小隊は中国人に対して略奪、放火、陵辱等はなかったと言える。私は、元来暴力は嫌いだし、戦闘や戦争にカーッと成る性格でもなく温厚な人間であった。ある日、朝鮮人兵隊が 3 人配属になった。中隊長は私の性格を知った上で、3 人を私に預けた。私は朝鮮人に対して差別をしなかった。3 人は明治大学在学の大川、徐田（やすだ）漢朱、中本性玉であった。現麻生太郎首相が創氏改名は朝鮮人が望んだのだと言って韓国から非難されている。彼らは自分の名前を捨てて日本風の名前を欲しがっていない。ある日、鄭州飛行場整備隊班長になり、3 ヶ月駐屯した。部落の村長が来て挨拶した。私は村の学校を視察した。教室では数学教師が分数計算を間違えて教えていたので、教員上がりの部下に週一度学校で算数を教えるように命令した。しばらくそのようなことが続いたある日、その村長が私に「戦争はやがて日本の敗北になる。日本軍人は戦犯になるだろう。しかし、あなたは悪い人ではない。私は、あなたが戦犯にならないような証明書を書いてきたから、受け取りなさい」という趣旨の話をした。現地にいる日本軍は正しい情勢判断が出来なったが、中国人は日本

軍敗北が近いと見ていた。私は、その証明書が有効性を発揮しないうちに日本に復員することが出来た。ある日、八路軍が影響力をもっている村に 12-13 人の部下を率いる先遣隊長を命令されたとき、前任者から次のような申し送りがあった。①兵隊は外に出さない、②部落の中国人をいじめるなである。これは兵隊を外出させると略奪などの蛮行を働き、八路軍の攻撃を招くからである。ある日、村に掃討作戦に出た。千葉県出身の兵隊の様子がおかしいので見ていると、強姦しようとしていた。私は石を投げてこれを制止した。彼は南京攻略でも同じことをしたに違いない。だから、申し送り事項は戦争状態ではあるが、日中軍は不用意な戦闘を避け、無駄な血を流さないと言う現場の隊長の知恵だろうと思う。八路軍は日本軍が立てこもる城壁をすでに包囲し、日本軍の殲滅（せんめつ）は容易であったが、戦闘が始まれば城壁内の中国人民が巻き添えになり多くの犠牲者が出ることを避けていたのである。八路軍はゆとりを持っていたので十五夜には、老酒と月餅お菓子を日本軍駐屯地門前に置いていった。これは無言の休戦を意味するのであった。当時、中国は日本軍の侵略を受けながら、蒋介石が率いる国民党軍と毛沢東や周恩来が率いる共産党軍（当時、八路軍、新四軍と呼ばれた）の内乱状態になっていた。共産党は日本の侵略と戦うために国民党と共産党は協力しようと「国共合作」を呼びかけたが、ついに協力関係が出来なかった。蒋介石の軍隊は人民に依拠しなかったが、八路軍は人民に依拠していたので、毛大人（マオタイレン）と尊敬されていた。終戦時には国民党の影響がある地域と共産党の影響が強い地域があった。ある日、中隊は渤海作戦を実施した。これは元日本共産党の岡野進が前線の日本軍に反戦を呼びかけるので、岡野捕捉作戦だと思った。下士官以上（私も伍長で下士官であった）には岡野の写真が配布された。

やがて、終戦になった。私たちの部隊は国民党軍に降伏した。武装解除されて捕虜収容所に入れられたが、内部は元の日本軍の秩序のままであった。中国人民は飢えていたのに、不思議なことに捕虜収容所には食べるものはふんだんにあった。8ヶ月間収容されたが、翌 1946 年 4 月山東省から上海に向かう列車に対して中国人が発砲してきた。中国人の怒りは大変なものである。こうして、ようやく中国から復員することが出来た。

なお、私は戦地で風土病に罹り高熱に悩んだ。1957 年千葉県世話課長が発行する「元軍人の傷病恩給請求について」の口述書には、私が罹患した病気は「感冒」となっている。しかし、これは軍医の不勉強に基づく誤診である。実際は黒熱病、またはカラアザール病とであった。私の軍人恩給は、口述書には伍長（注）となっているが軍曹扱いである（終戦時に昇格したものはポツダム軍曹と呼ばれた）。

元沖縄県座間味島守備隊長が大江健三郎著の「沖縄ノート」で、軍が住民に

自決を強いたというのは嘘であり、名誉毀損だと、裁判をして敗訴しているが、私の経験では軍が関与していることは確実である。作戦に出るとき、兵隊に自決用に手榴弾が 1 個支給された。作戦が終了して兵舎に戻ると班長の私が全て回収し保管した。それほど重要な手榴弾であったから、住民に大切な武器を配る場合は自決しかない。

もう二度と戦争は繰り返してはならない。

(編集委員注) 陸軍の下士官までの階層は二等兵、一等兵、上等兵、兵長、伍長、軍曹、曹長、准尉と続く。

堀内徳司さん証言 (26 歳、軍隊経験者・農業従事、千葉県芝山町)

私は当時、中国の戦地から病気治療で佐倉陸軍病院から退院して農業に従事していた。軍隊生活から述べる。1940 年 12 月 1 日佐倉連隊に入隊し、3 日後に東京芝浦棧橋から出発し、青島に上陸した。山東省肥城県肥城に駐屯する第 4256 部隊第 1 大隊第 38 中隊に配属された。任務は八路軍(後に、中国人民解放軍となる)を掃討する討伐(注)であった。当時の中国の村は城壁で囲まれていた。ある日、中国軍と戦闘になり、中国軍 3 名が捕虜になった。日本軍は自ら捕虜になることは「生きて虜囚の辱めを受けず」と教えていた。国際法では捕虜の虐待は禁止されていたが、日本軍は中国人捕虜を生かすことを認めなかった。中隊は初年兵の私に、彼らを処刑することを命じた。軍隊では上官の命令は絶対であった。上官は頸動脈をつくと指示し、私は実行した。今も、すまないことをしたと反省している。私は上官の命令を拒否できなかったことを悔やむ。掃討作戦では、兵隊は 4-5 人が一組になっては、八路軍兵士搜索で家の 1 軒、1 軒をしらみつぶしに調べた。女性を見つけると強姦し、複数の兵隊で輪姦した。兵隊は明日の命がないので気持ちが荒れていた。だから、40 歳以下の女性は村にいなかった。私は命令でない強姦はしなかった。日本兵も掃討でなければ、駐屯地で女性を強姦することはなかった。掃討作戦に出ない日は、城壁内部の中国人と生活の話などを交流した。私も中国語を勉強したが、日本軍占領地では中国人も日本語を話した。しかし、私は中国人と交流しているつもりであっても、中国人は日本人を心の中では侵略者と見ていたと思う。軍隊の中では、よく天皇の名前を用いて、兵隊たちを直立不動の姿勢をさせて威張る上官がいたが、私は、表向きは従っているように振舞ったが、腹の中では服従しなかった。そもそも、大元帥の天皇は権限が大きいのだから戦争を中止すべきだと考えていたからである。これは後述する父の大きな影響を受けていたからである。

1942年頃、私は、作戦で黄河を渡る時に深みにはまり、右耳に黴菌が入り、中耳炎になった。耳から膿が出るようになった。

1943年に中国で生水を飲んだことにより、ひどい下痢になった。軍医は戦争栄養失調症と診断した。戦地には十分な医薬品が無かったから、この病気の罹病者の半数が命を落とした。私は同年秋、帰国治療が許された。九州、四国の陸軍病院を転々とし、最後に東京第二陸軍病院に收容された。中耳炎は治癒したが、聴力は低下した。1944年10月ようやく退院した。はじめは退院後、原隊に復帰するよう指示されていたが、1年以上の長期入院だったので、いったん除隊になった。その後、召集令状はこなかったから、農業に従事した。戦争経験があることから、二川青年学校での軍事訓練の指導をやらされた。すでに本物の銃は無いので、木銃を使い青年に匍匐（ほふく）前進の訓練をしたが、攻撃の訓練はしなかった。まもなく終戦になった。

1945年3月10日の東京大空襲の夜、芝山からも東京の上空が真っ赤になっているのが、見えた。半分焼け焦げた紙幣が空から舞い落ちてきた。しかし、千葉の空襲は知らなかった。横芝町に陸軍航空隊の基地があったので、米艦載機が毎日空襲した。すでに同基地にはまともな練習機すらなかった。この艦載機が芝山町上空を飛行したが、農家に機銃掃射はしなかった。

1945年8月15日、家で天皇の敗戦宣言を聞いたが、よく覚えていない。よかった、これで多くの人が死なずにすんだ、平和な日本になると青年学校や友人に話したが、彼らは意味を解せず、「うん、うん」と答えるだけだった。終戦になっても、農業経営は苦しかった。配給制度の下で米は供出しなければならなかった。生きるためには収穫高を少なめに申告したり、自ら食べる米を売ったりして現金収入で生活必需品を買った。

私の父親は堀内晃、母親はミツと言った。父は日本共産党が1922年に創立した時からの党员であった。父は中国への侵略戦争に反対し、農業改革による農民救済を村人に訴えて、村人たちを指導していた。父は地下活動の結核を患った共産党员を家に匿い、静養させていた。治安維持法が改悪され、国体を否定するものは最高死刑となった。父は成東警察署からねらわれ、村の駐在巡查が、いつも父が帰っていないか調べに来た。そのたびに父を裏山に逃がした。父は治安維持法違反で20年間のうち、合計5年ぐらいは千葉刑務所に収監されていた。母と私は刑務所の父に面会に何度も行った。網越しの面会であるが、対面時間は5分間きりしか許されなかった。話す内容にも制限があった。父は囚人服を着ていたが、いつも元気であった。村に残った母は辛い思いをしていたが、父の運動を理解していたから、獄中の父を励まし、子どもを必死で養育した。戦後、父の活動は合法となり、変な目で見られることもなく堂々と活動した。戦前より忙しく働いた。しかし、結核の党员を匿ったことが原因で両親とも結

核に感染して、父は 51 歳、母は 50 歳で他界した。

私は、戦後農業に復帰して、落花生栽培を始めた。私は負けず嫌いであったので、落花生を研究するために、千葉県農業試験場に通り勉強した。おかげで、落花生については、たくさんの賞をいただいた。農業は平和でなければならない。

私は両親がなくなる前に隣部落の女性と結婚して二人を安心させて、親孝行を果たした。私の妻は 5 年前に他界をした。戦争がなければ両親はもっと長く生きて社会改革に貢献できたと思う。私も戦場で殺し合いをしなくてすんだ。政府の行為による戦争は絶対に繰り返させてはならない。

伊藤清さん証言（〇歳、なにをしていたか、どこに居られましたか）

1. あの戦争が終わり復員船を待つ間にも

かつての日中戦争から太平洋戦争と続いた昭和の時代を日本の国民として生きてきて、平成の今日もこの国に生きておられる方は、あの昭和の戦争の記憶として、打ち振る日の丸の小旗と万歳の声に見送られて戦場に赴いた後、再び帰ることのなかった子供、親、兄弟、夫あるいは恋人たちの面影を、今も鮮やかに蘇らせるのではないだろうか。

アッツ・サイパン-硫黄島その他の島々での玉砕、フリッピン戦線などで生きながらミイラとなった餓死者、さらには俘虜として抑留され極北シベリヤの凍土の中に埋められ、あるいは沈没する艦船と運命をともにして海底深く沈められたままの兵士など、その数ははかり知れない。

遠い戦場だけでなく、本土においては、多くの老若男女の市民が、アメリカ軍の空爆により焼死あるいは爆死し、特に広島・長崎の原爆では一瞬にして町とともに溶け去り、そこで辛うじて生き残った者も原爆後遺症にあとあとまで苦しみを引きずることになる。沖縄では凄惨な地上戦に一般市民が巻き込まれ、親子兄弟で殺しあう集団自決など、その地獄は忘れることはできないであろう。

私は中国の戦場に送られ、そこで多くの死を見てきた。天皇のために死ぬことを最高の名誉と心得、死に際には「天皇陛下バンザイ」と叫ぶことを教えられてきたはずなのに、「やられた！お母さん、助けてくれ！」と最後の声を振り絞り私の傍で息絶えた兵隊。私など初年兵が「古兵殿」と呼んで恐れ敬った星二つの寡黙な三年兵であったが、最後に必死に母親を求めたそのひと声は、いつまでも私の耳底から離れなかった。

戦闘の最中での戦死がいいと言うわけではないが、もう戦争も終わって、もうひたすら故国の風景を夢みながら復員船を待ちわびていた日々のなかで命の消え細っていくほど哀れなものはなかった。俄か拵えのバラック小屋の一つが

病人の収容所にあてられていたが、藁を敷いた床の上に、痩せ細り垢まみれになって、それでも虱だけは這い回っている栄養失調の身体を横たえた若い兵隊は、生きながらすでに死臭を放っていた。見舞いに訪れた私に、落ち窪んだ眼が追い続けるように迫ってくる。しかし敗残の日本軍の部隊の一兵士に過ぎない私が、彼らのために何をしてやれたであろうか。長く伸びた爪を摘みつけてやりながら、「もうすぐ日本に帰れるんだ、元気を出して頑張るんだぞ」と、耳元で囁くのが私の精いっぱい出来ることであった。やがて誰に看取られるということもなく、静かに、次々と息を引き取っていった若い補充兵たち。その肉親が、帰郷を目前にして異郷の地で孤独に死んでいった息子たちのその死にざまを知ったなら、その非情の無念さをどんなに嘆き悲しむことであろう。それを思うたびに、いまでも私の胸に熱い怒りがこみ上げてくるのを抑えることができない。

2. 日本人ばかりではない戦争の悲惨

私自身は1945年8月15日の敗戦によって死を免れ、翌年26歳の年に再び日本の土を踏むことができたが、幼い時から一つ家で一緒に暮らし成人した子供たちのうち、兄は東部ニューギニア、従兄はビルマでそれぞれ戦死、どちらも一片の紙切れが納められた白木の箱が届けられたきり、骨のひとかけらも戻ってきていないことを親たちから知らされた。また私には、心を許しあい、文学や社会や人生、将来の夢について語りあった一人の学友がいて、その妹と私が結婚することの橋渡しをしてくれたのですが、原爆という夢想だにできなかった非人道的悪魔的な人間破壊兵器の投下される4年前、戦地に赴く私を宇品の埠頭で見送ってくれたのが彼との最後でした。原爆で殺されていた彼とは、もう再びこの世で相見ること、文学や社会についてともに語りあうことはできなくなってしまった。彼や私の妻一家の大黒柱であった長兄は、敗戦の前年に召集されて中国前線の部隊に編入されたが、これも慣れない土地での軍務に健康を損ない、まもなく奉天の陸軍野戦病院で亡くなる。早く夫を喪ってからというもの、女手ひとつ後家の頑張りで長兄ら子供たちを立派に育てあげ、余生はその長兄とともに暮らすことを念願としていた老母と、妻と、まだいたいけない幼い二人の子供を残して。頼りにされていた子、夫、親であった長兄は、もう再びとその家族の前にその姿を見せることはなかった。

このように、私たちをはじめ日本中の多くの家族が、戦争による何らかの悲運を体験してきた。しかし、このような戦争の痛みは私たち日本人ばかりではないことを振り返ってみなければならない。日本の植民地であった朝鮮半島から、多くの朝鮮人が、日本本土の働き手の不足を補うために、朝鮮の郷里にある妻子などその家族から無理やり引き離されて強制連行され、日本本土の炭坑や軍需工場などで過酷な労働に酷使され、なかには病に倒れた者も少なくない

とのこと。またなかでも、うら若い女性たちが集められ、従軍慰安婦として戦地に送られ、その半生いや生涯を台無しにされた事実も、決して忘れてはならない重大な国家的犯罪的行為による戦争被害といわなければならない。さらに言えば、私もその一員として駆り出された中国各地の戦場、いやそこは日本軍が侵入するまでは戦場ではなく、中国の人々が平和に暮らしていた町や村であったのに、侵入してきた日本軍によって戦闘員ばかりでなく住民に対する殺戮、略奪、暴行などが数限りなく行われたのである。

捕虜となった中国人を初年兵の銃剣術の刺突訓練を兼ねて、なによりもまだうぶな兵隊に人殺しの度胸をつけさせるための道具として、ブスブスと銃剣で突き殺させることなどは、中国に派遣されたどこの部隊でも日常茶飯に行われてきたことである。将校や下士官は持ってきた軍刀の切れ味を試すとか言って、そうした捕虜の首を喜んで匆ねていた。事実かどうか知らないが、木に縛り付けた妊婦の大きな腹を生きたまま切り裂いてみたとか、殺した中国人の腿肉を食ったとか、得々として喋る兵隊の話も耳にしたこともある。それが事実とは思いたくないが、戦争の中にたたき込まれた人間は、もう通常の人間としてあるべき理性をもった人間でなくなるのだ。恐ろしいことだ。しかも、そうした残虐行為の根底には、日本人の民族的優越感、その裏返しである中国人（中国人ばかりでなく朝鮮人を含むアジアの人々）に対する明治以来の抜きがたい蔑視思想があることは明らかである。日本が盟主となって大東亜共栄圏を構築するという帝国主義的構想も、このアジア蔑視の日本人の思い通りに裏打ちされていることはいうまでもないであろう。アメリカ空軍による日本本土の都市爆撃によって多くの一般市民が焼き殺されたが、これに先立ちまだ日本空軍が健在のころ、日本空軍による中国の首都重慶に対する無差別爆撃は、そこに住んでいた婦女子を含む一般市民に甚大な被害を与えたものとして、国際的非難を浴びたものだ。その後太平洋戦争になってアメリカは日本に対しそれ以上の残忍な爆撃を繰り返しやったが。

私たちが戦争によって私たち日本国民の被った戦争被害、その惨禍を思い起こす時に、同時に日本の国家が、特に中国・朝鮮を初めアジア諸国の人々に与えた苦難の大きさに思いをいたすことを絶対に避けることはできないであろう。なぜなら、私たちが戦争による被害の記憶を決して忘れることがないと同じように、それらの国々の人々も、日本によって加えられた植民地支配や戦争の被害を、決して忘れられない記憶としていつまでも記憶し、語り継ぐであろうことを、悟るべきだからである。あの時代を生きた日本人の一人として、私たちにそれらの諸国民に与えた苦難に対し大きな責任があると考え。これは決してイデオロギーなどの問題ではなく、人間としてあるべき心性の問題ではないであろう。

3. 命ばかりではなく人間の自由を奪う

戦争は、人と人との殺し合いであり、この地上における最悪の犯罪というべきであろう。そればかりではない。かつて私たちが戦時中体験したように、戦争は、国民のあらゆる自由を束縛し、失わせる。戦争に反対する言論が禁じられるだけでなく、戦争に疑問をもつだけで警察に逮捕され、刑務所に放り込まれるようなことさえ起きたのです。政府の政策に迎合し、戦争を賛美することだけが称揚され、許されたのだ。

思想、宗教、言論、結社、学問などの自由はいうまでもなく、日常の行動まで厳しく制約されることになる。若い兄と妹とが並んで歩いているだけで、警察官に呼び止められ、交番に連行され、長時間説諭されるのだ。「戦地で兵隊さんが苦勞しているこの非常時に、兄妹であろうと、若い男と女が、だらだらと一緒に並んで歩くなどとは、ふしだらで不見識極まる。」というわけだ。笑い話ではない。実際にこんな馬鹿げた事件はいくつも起きたのだ。

さらに商工業者にこたえるのは、戦費を賄うため税金がどんどん重くなることである。物資も不足して営業も困難になり、中小業者の中にはこれまでの家業をやめ軍需工場などの工員に動員された者も少なくなかった。当然、物価が上がり国民の生活も窮屈になり、苦しくなるが、文句は言えない。不平不満がうっかり漏れて警察や憲兵の耳に入ると大変である。何日も警察署や憲兵隊に留置され絞り上げられることになる。「非国民」として非難され村八分にされかねない。物価や物資が統制され、その違反で小さな商売人が警察に引っ張られることもしばしばある。

4. 尽きることのない鎮魂の平和への途

戦争は、人を戦火に巻き込み、生きる権利を危やうくさせるだけでなく、あらゆる自由を奪い去り、また日々の経済生活を圧迫する。私たちは、そのことを昭和の戦争のなかで嫌というほど味わってきたはずである。そうした苦しみの多くは自国も他国も同じである。現在大量破壊兵器を持つとしてアメリカによって仕掛けられたイラク攻撃や9.11に対する報復としたアフガンに対する戦争によって、仕掛けられた側だけでなく仕掛けた側もともに傷ついていることがそのことを証明している。ブッシュ大統領に代わったオバマ大統領がアメリカ軍のイラクからの撤兵を公約せざるを得ないのもその傷の重み、その痛みによる国民の反戦意識に応えざるを得ない状況にあるからである。オバマはアフガンの兵力を増強すると言っているが、これもまた傷を大きくするだけだと思う。仮にこの戦争でアメリカが軍事的に勝利したとしても、報復はさらにその報復に対する新たな報復を生むだけである。再び9.11が繰り返えされないという保証は何処にもない。日本は、アメリカの戦争に加担すべきではない。インド洋のアメリカ艦船などに対する給油活動からも早く手を引くべきである。

また国内政治においても、軍事費を大幅に削り、国民の福祉や教育の充実にあてなければならない。貧しいがために満足に医療や教育を受けられないなどということが一人でもあってはならない。

貧富の格差、東西の格差をなくし、戦争のない平和な世界をつくること、それが戦争の悲劇を体験した私たちの目指すべき唯一の途ではないだろうか。それが、あの昭和の戦争の時代が終り、世界の範となるべき戦争の放棄、軍備及び交戦権否認を定めた憲法 9 条をもつ平成の世になっても、いまだに帰ることのない私たちの子供や兄弟や親や夫や恋人たちへの、そして中国を初めとするアジアの多くの犠牲者たちへの、尽きることのない贖罪と鎮魂の途でもあるのではないだろうか。(昭和の戦争の体験から、今、平成の私たちが学ぶこと)

